雑穀街道普及会の顛末記
～見捨てられた穀物への多くの感謝と少しの謝罪

木俣美樹男
雑穀街道普及会／植物と人々の博物館

A Detailed Report of Japan Hirse Straße Promotion Band;
Many Thanks and a few Apologies to the Orphan Crops

Mikio KIMATA
Japan Hirse Straße Promotion Band, Plants and People Museum

要旨

関東山地の農山村を頻繁に訪れるようになったのは 50 年ほど前からである。1972 年に東京に出てきて、雲取山に登って三峯に下ることから始めて、1974 年からは雑穀の栽培・調理のフィールド調査のためにたび重ねて関東山地各地の山村に行き、爾来、何百もの農家を訪問してきた。この間に経験した不条理で非情理な社会事象に伴う 3 つの謎を抽出し、解き明かそうとした。本稿は、東京学芸大学定年退職後の 10 年間に研究成果を地域振興に役立てようと多大な時間を傾注してきた雑穀街道の普及提唱による雑穀栽培の普及活動に関して、その経過を検証した。雑穀街道普及会は多くの方々や団体による協力があったにもかかわらず、地域行政や地元市民等の関心を充分に得ることができなかったので、解散するに至った。しかしながら、この活動過程において 3 つの謎を解く鍵は見出された。

緒言

関東山地の農山村を頻繁に訪れるようになったのは 50 年ほど前からである。1972 年に東京に出てきて、東京教育大学大学院に入学し、雲取山に登って三峯に下ることから周辺の山々に行き始めた。1974 年から東京学芸大学に就職して、雑穀の栽培・調理のフィールド調査のために関東山地の山村に行くようになり、爾来 50 年、定点観測のように、たび重ねて何百もの農家を訪問してきた。一方で、日本全国、ユーラシア各地のフィールド調査も続けて、国内外で多様な経験をした。これらは『日本雑穀のむら』（2022）と『雑穀の民族植物学』（2024 一部公開）で記述している。日本における雑穀とは、コムギ・イネ・トウモロコシ以外の穀物類、アワ・キビ・ヒエ・モロコシ・シコクビエ・ハトムギおよびソバ・センニンコク・キヌア等のことである。特にイネ科雑穀とはソバは 1950 年代までは日本の全土であまねく生産されていた。世界的にみれば、現在でもアフロユーラシアのサバンナやステップなど半乾燥地や丘陵地で相当量が栽培されている。

本論では、とりわけ、この 10 年の間に雑穀街道の普及活動を通じて不条理かつ非情理な社会事象を体験した。地域振興を阻害するこの経験に伴う 3 つの課題（謎）を抽出し、解き明かすことにした。西暦第 2 千年紀に生きる解き明かしたい 3 つの謎（課題）とは次の事項である（木俣 2018）。なお、雑穀街道普及会の会則は付録 1 に示した。雑穀の調査研究や普及活動の前史およびこの 10 年間に関しては付録 2 に、特に、国際雑穀年 2023 の普及活動については付録 3 に示した。

人間はおおかた齢100年に満たないので、植物研究官ETや廃棄物処理機地球型WALL-Eのように千年紀を見て生きることはできない。しかし、縄文農耕の数千年紀を受け継ぐひと

時の駅伝走者にはなれる。イネ米だけでなく、すべての作物を正月・小正月の儀礼を尊重して、行事食や健康食として、人々に寄り添ったその長い歴史を受け継ぐのは大切なことである。生物文化多様性を消滅させてはならない。家族自給農耕は続けるべき生業であり、家族のためにする有機農法は手間がかかり、安全ではあるが沢山は取れない。多品目多品種、在来品種の選抜は飢饉の危険を避ける方法だ。親しい知人には分かち合い、お裾分けはうれしい。しかし、現世の人々は先人の生活文化に関心がない（**第1謎**）。

秩父多摩甲斐国立公園周辺の農山村で、50 年ほど環境学習・環境保全を目的とした地域振興に関わってきた。篤農の人々には歓迎され、とても親しくお付き合いいただいた。彼らからは日本国の為に頑張ってくれて、ありがとうと感謝されてきた。しかし、役場行政や農業協同組合などの団体からほとんど関心を向けられたことはなかった。これは地方だからではなく、私は関連団体の理事を兼務していたので、全国中央の役員と同席することも多かったが、彼らの対応も同様であった。地域の行政は、村人でない、関係者でない者の余計なお世話、迷惑と敬遠したのであろうか。私のようなマスメディア嫌いで、名利を求めていない変人は猜疑の目で見られるのだろうか。自然文化誌研究会が10年ほどして環境活動を定着させると、四度も決まって追放の憂き目にあってきた。地域振興のための市民活動が軌道に乗ると地域から排除される（**第2謎**）。

世間では地域創成と助成金の大風呂敷が舞っているが、小利口な若者は村に誇りを持てずに都会に出ていき、村に残るのはどうしても先祖伝来の土地を大切にしている老人だけになるのだろう。もう高齢で畑作業がつらく、妻女に強く励まされなければ、もう働けない。息子は野良仕事をしないで、週末は遊びに行ってしまうと民宿主人は言う。頑丈な電気柵に囲まれた畑さえも耕作放棄されている。

秩父多摩甲斐の地域では、かつて明治前期には薩長閥明治政府への反骨精神もあって、自由民権運動が勢いをもっており、五日市憲法草案も地域住民が独自に検討していた。名利にとらわれない高い自尊心をもった地域の豪農や豪商が地域住民の窮状を見かねて、自由民権運動をしたが、自由党や秩父困民党なども明治維新政府の苛酷な弾圧で、指導者は獄中でひどい目にあわされ、一家は没落・離散した。しかし、それ以後、地域住民は彼らを助けず、敬意を表さず、忘却の穴に放り込んだ。この構造がその後100 年以上たってもあまり変わらないのは、明治維新政府の罪過によるのだろうか。このように地域社会の歴史への誇りを消し去ってきた（**第3謎**）。

多くの方々による協力があったにもかかわらず、篤農の伝統的知識や学者の蓄積された科学的知識への敬意がない地域行政や地元住民等の関心を得ることができずに、雑穀街道をFAO世界農業遺産に登録申請する活動は不成功に終わった。

1.対象地域と活動方法

東京学芸大学定年退職後の 10 年間には研究成果を地域振興に役立てようと多大な時間を傾注して、雑穀街道の提唱による雑穀栽培の普及活動を行ってきた。とりわけ、2023 年は国際雑穀年であった。インド政府か提案して実現したのであり、長年の共同研究者、全インド雑穀改良計画の統括責任者であった A.シタラム博士の努力によるものである。私も彼との共同提案で 1967 年に国際雑穀フォーラムの提案をしている。

現在は国連家族農業の 10 年（2019～2028）で、国連小農宣言（2018 年）もなされており、昨 2023 年は国際雑穀年 International Year of Millets であった。インドでは 2018 年に全国雑穀年を祝賀し、インド外務省は国際連合食糧農業機関 FAO に国際雑穀年を提案して 2026 年に予定されていたが、国連栄養行動の 10 年（2016～2025）の期間内に入れるために 2023 年に前倒しして決定された。これは雑穀の栄養的価値を高く評価したからである。私たちが実施してきたインドとの共同調査研究の成果も大きく貢献していると、シタラム博士からは評価されている。

1）対象地域：雑穀街道

私たちが敬愛する上野原市西原の降矢静夫（1910～2003 年）は、自分たちの食生活を賄ってくれた雑穀の恩を忘れてはならないとの信念から、彼岸に旅立つ直前まで雑穀栽培を続け、在来品種の種子を絶やさないように保存していた。実際、雑穀はミネラル分はじめ栄養的価値が非常に高い食材として、国内外で見直されている。しかしながら、1960 年代以降は、国の工業優先と農業軽視の政策により、また山村地域の道路拡張造成により、多くの若者が町に働きに出たために山村の家族農業や林業は従事者の高齢化により衰退の一途を辿ってきた。耕作放棄地や所有者不明土地が激増している。

雑穀街道 Hirse Straße に沿う山村では多様な雑穀が栽培されてきた。そこで、私は生物文化多様性が豊かな地域、多摩川水系の丹波山村、小菅村から 相模川水系の上野原市、相模原市緑区までをつなぐ道を、雑穀街道と呼ぶことを提唱した（初出は第 34 回環境学習セミナー2014)。これらの地域は縄文時代中期の勝坂式土器の文化圏にかさなる。栽培植物の在来品種を保存・継承するために種子を共有するつながりを創り、山村の生業、農耕技術や加工・調理技術、多様な食材・料理を継承し、未来に向けて山村社会の復元力を高め、家族とともに幸せに暮らせるようにしたい。伝統的な農作物在来品種をめぐる農耕文化、栽培、加工、調理、儀礼などは、縄文時代以来の祖先から継承してきた社会的共通資本、現在も生きている大切な生業文化財である。この山村の生活を豊かにし、男女そろっての健康長寿を支えてきた麦・雑穀を中心としてきた生物文化多様性がとても大事にされている地域が、私たちの暮らしている関東山地の山村である。縄文文化の中心地は関東甲信地方で、今日でも山住の生活文化が生業や食べ物に色濃く継承されている。

雑穀街道は山村と都市をつないで、縄文時代から未来へと、素のままの美しく楽しい暮らしを継承するために、雑穀や豆類、野菜などの在来品種を栽培保存する活動を普及する。現地、農耕地での環境保全活動こそが有効である。繰り返して記すが、雑穀街道に沿って、今も雑穀など在来作物を栽培している山村がある。山女魚養殖を初めて成功させた小菅村橋立、穀菜食による健康長寿で世界に知られた上野原市棡原、トランジション・タウンで知られた相模原市藤野などがある。世界農業遺産の認定を受けるに正にふさわしい地域である。

FAO 世界農業遺産は現在日本では 15 か所（2024）が認定されており、山間地農耕で雑穀や焼畑と関わっているのは、徳島県にし阿波地域の傾斜地農耕システムおよび宮崎県高千穂郷・椎葉山地域の 山間地農林業複合システムの 2 か所である。雑穀が近年までもっとも栽培されてきた雑穀街道地域を 3 番目に登録することが、私の意図した手段であった。

2）雑穀街道普及会の活動：

準備日程（2021.12～2024.2）では、次の活動を実行した。
①雑穀栽培者を増やす。 上野原市の雑穀在来品種、アワ、キビ、モロコシ、ヒエ、シコクビエ、トウモロコ シ（甲州）など、キヌアおよびジャガイモ、サトイモ、ウズラマメ（ひょっと）、シャクシナなど、相模原市の雑穀在来品種、アワなどやダイズ（津久井在来）、ノラボウ、 キュウリ（相模半白）など、茶や桑（養蚕）などの栽培者を増やす。ア）栽培講習会を連携して開催する。イ）雑穀種子と栽培手引きを配布する。ウ）雑穀など栽培者組合を創る。
②雑穀街道協議会（申請団体）の創立準備をする。ア）雑穀街道協議会準備会の活動申請団体を創立するために、協賛後援団体への説明などの準備会活動を進め、参加・ 賛同を依頼する。 イ）シンポジウムやセミナーを行い、普及活動を行う。ウ）雑穀街道普及会は雑穀街道協議会が創立されるまで暫定事務担当をする。
③雑穀街道協議会（申請団体）を創設する。 ア）事務局担当の設置：定款、組織規程、構成員名簿、会計規程の作成。イ）農業遺産保全計画を作成。ウ）創立総会の開催。
④農林水産大臣への申請準備。ア）山梨県と神奈川県の知事の意見書。イ）学術機関の意見書。

古守豊甫・鷹觜テル両博士の意見では、椢原の長寿の要因は次の点と指摘されている。マクバガン・レポート（1977）、チ ャイナ・スタディ（2004）とおおよそ同じ見解である。
①長寿椢原は麦を中心とした雑穀、芋類、豆類を十分に摂取して、ビタミン B1、B6 等を充実してきた。 ②全粒粉および小麦胚芽の高度活用により、ビタミン E を多量に摂取し、不飽和脂肪 酸に対する比も正常値を示している。 ③低コレステロール食品を適当に組み合わせ、動物性食品を発達段階に応じて適量にとってきた。 ④椢原地区特産の冬菜の常食によって、ビタミン A、C、鉄分を充分に補給してきた。 ⑤発酵食品を充分に活用し、腸内細菌を正常に保っていた。 ⑥調理はすべて一物全体食、土産土法でなされていた ＋⑦食物繊維多含食品を補充する。健康・予防医学、栄養学を大切にして、ピンシャンコロリ天寿を全うする（古守・鷹觜 1986）。

趣意書：雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録しよう。
雑穀街道普及会 関東山地南部の山梨県東部地域および隣接する神奈川県北部地域は、首都圏にありながらも、過疎・高齢化が著しい典型的な農山村地域である。秩父多摩甲斐国立公園の周辺にあり、野生生物が豊かに生存している一方で、野生動物による食害は森林から 農耕地に及んでもいる。また、耕作放棄地も拡大し、自然環境に適応して形成されてきた伝統的な山間地・里山での栽培植物の在来品種、農耕技術、それらの加工調理技 術、さらに農耕儀礼など、伝統文化の継承が消滅・危急の時期を迎えている。特に、フンザと並び称された上野原市椢原地区は、穀菜食による世界的に知られた健康長寿村で、生物多様性に依拠した文化多様性も豊かに蓄積されてきた地域社会であった。
しかし、この 50 年ほどで、生物多様性のみか、随伴する文化多様性までが過疎・高齢化の末期的状況により、著しく衰退傾向にあり、継承の危機に瀕している。したがっ て、山間地・里山における生物文化多様性保全の手法を継承して、野生生物と人間が共存、共生可能な生活技能を再創造することは、自然共生社会を構築するために最重要課題である。

地球環境変動、多くの自然災害や病虫害の拡大など、現代文明は危機的状態にある。人間社会を安定的に維持するためには、とりわけ食料安全保障が基盤であり、地域に適した在来作物の衰退を防ぎ、それら品種の保全・継承・普及に努める必要がある。

このような課題解決に向け自然共生社会を再構築するために、農山村地域の自然共生的な生活文化の基層（縄文文化の系譜、畑作伝統の温故）にある、栽培植物、雑穀、いも、野菜などの在来品種を保存継承するためのローカル・シード・バンクを地域で共有する体制をすでに構築し始めている。さらに、自然共生してきた農山村社会で、栽培植物在来品種の栽培生産を維持、加工調理し、伝統食を活かしながら、新たな食品を開発して、地域経済を展開するように、生物文化多様性保全を確保する一般的手法を探求してきている（移行への知新、トランジション）。これまで 40 年余りの地道な成果の蓄積を発展させ、NPO法人、農業生産法人、自治体などが連携する雑穀街道協議会を組織して、FAO 世界農業遺産「雑穀街道～農山村における生物文化多様性保全」の 登録申請をめざす。

2.調査・研究方法

自然科学論文の手順に従い、研究対象と研究方法、結果事実を公正に記録して、できる限り誠意をもって冷静にこの過程を解析、考察する。原則として個人名・敬称、個人情報は除去するが、個別の行為や団体名については明確に記す。地域振興に重要な課題解決である、その3つの謎を解く鍵を見出すことを目的とした。本稿は環境学習原論の統合的な心の構造と機能の存在状況の分析から深く考察して、山村地域の振興方策のあり方を改善する希望を提示する。

雑穀街道普及活動において体験的に観察した事実を裏付ける配布文書や記録映像（youtube）に基づいて、上記の 3 つの謎を考察する。10 年間には多くの関連文書を公表してきたので、これらは根拠資料になるに違いない。

2.雑穀の普及活動とその経過観察の結果

1）普及活動の経過

多摩川水系と相模川水系を結ぶ雑穀街道には経験豊かな篤農が幾人もいたので、長寿村椣原の研究の古守豊甫博士、全インド雑穀改良 計画コーディネーターA.シタラム博士、コルカタ大学のパンダ博士、考古学の松谷暁子博士、民族植物学の阪本寧男教授、菌学の加藤肇教授、食品総合研究の平宏和博士ほか、多くの研究者たちが調査研究のために訪ねてきた。

生物多様性条約締約国会議（2010 名古屋）において展示と提案（生物多様性条約市民ネットワーク／たねと人々の未来作業部会）をした。雑穀研究会シンポジウムにおける巡検を 3 回担当した。 生きた文化財である、多様な雑穀種、その在来品種が農耕地で保存されており、日本エコミュージアム研究会大会も開催した。

旧石器時代、縄文時代の遺跡が多く発掘されている。新嘗祭への献穀も何度か行われた。私たちの生活は現在でも、長い歴史で発展してきた多様な文化が積み重なって営まれている。これらの基盤となっている農耕文化は特定の地域で、地域固有の作物群を基に起源して、世界各地に伝播した。イネ、ムギやトウモロコシとは異なり、雑穀は主にサバンナ気

候において栽培化された。アフリカ、インド、中国などを経て、縄文時代以降に順次、日本に伝播してきた。

植物と人々の博物館／森とむらの図書室では、家族自給農耕、家庭菜園、市民農園、などについても地域調査の研究資料を提供している。財団法人森とむらの会の農林業政策提言のための、調査研究の全資料も継承し、保管してある。植物と人々の博物館は、東京学芸大学と小菅村の社会連携協定により、エコミュー ジアム日本村のコア博物館として小菅村井狩にあり、植物標本、民具などを多数収蔵、展示している。森とむらの図書室では日本のほか、インド亜大陸、ユーラシアや北 アメリカ大陸で収集した農林業、環境、教育、民族学などの文献書籍（約 8,000 点）を所蔵、日本村塾セミナーや雑穀栽培講習会なども開催し、雑穀栽培見本園も維持し、在来雑穀の自家採種種子を希望者に配布している。

他団体と連携して環境学習市民連合大学をウェッブ・サイトに作り、セミナーを公開開催し、普及啓発活動を展開している。雑穀や在来作物の栽培・加工・調理、伝統的知恵、環境学習など基礎研究から応用研究を地域振興に寄与するように提供してきた。また、東京学芸大学環境教育研究センターとしても、雑穀ほかの栽培植物在来品種で、山村民（小菅村小菅の湯）と都市民（小金井市パン和洋菓子組合）の協働により商品開発を行ってきた。

このように 50 年（1974 年～現在 2024 年）に渡って、定点参与観察してきた。20 世紀後半においても、日本で最も多くの穀物の種類、在来品種が残り、多くの篤農が継承してきた。しかし、繰り返し強調するが、雑穀をはじめ、芋類、豆類、野菜類ほかの在来作物品種も急激に生物文化多様性を衰退させて、消滅に向かっている。家族が生存するための、これら伝統的な優れた食材を保存するように、地域社会の理解を広めて、再び普及する必要がある。伝統的な栽培植物の栽培、加工、調理技術を伝承し、生物文化多様性保全を継承したい。上野原市西原に現在も機能している、自然エネルギーで動く水車を活用、維持する。

日本における雑穀の栽培面積は急減してきたが、中山間地の多い日本では麦や雑穀は本来、重要な食料である。現在、農林水産省の公表自給率 38%、しかし実際はたった 18%しかない（高橋 2023）。家族や地域市民の食料安全保障のために自給を高めるためには、麦・雑穀の復活が必要である。平地の水田稲作（夏）に加えて、麦作（冬）、また中山間地での雑穀作（夏）と麦作（冬）を復活すれば、食料自給率は倍以上に復活する。中山間地の地域振興も図れる。共有地、入会地を社会的共通資本として拡大すれば、耕作放棄地や所有者不明土地は減少する。都市民も自然に親しみ、小規模自給農耕を楽しめる。自家有機栽培の野菜は安全で美味しく料理ができる。素のままの美しい暮らし（sobibo）で、家族は幸せになる。

雑穀街道普及会は自給農耕ゼミを、神奈川県相模原市緑区佐野川と東京都小金井市で、植物と人々の博物館／日本村塾および環境学習市民連合大学と連携して開講している。この地域には現在でも在来品種を継承している篤農家がある。旧家の土蔵には穀槽があり、飢饉に備えてアワと陸稲の種子を保存してきた(図 1)。このアワはこの地域の在来品種で、私たちが農家から分譲を受けて保存していたのである。

2）団体および個人の対応行動の事例

東日本大震災の際に、放射性物質からの遺伝的被害を避けるために、東京学芸大学に系統保存していた穀物など約 1 万系統の現地調査による収集種子（遺伝子資源）をイギリスの王立キュー植物園のミレニアム・シード・バンクに緊急避難で移管した（2011）。この際には、相当量の放射性物質が東京にも拡散し、計画停電に対する種子貯蔵庫の非常用電源も確保できなかった。震災で重ねて見捨てられても、生きている穀物種子を救うために、個人の判断で緊急にイギリスに送ることにした。これまでも、ましてや震災時にも、研究者を含めて誰も関心を持たずに、救援はなかった。この判断は日本人研究者としてまことに情けなく、絶望的な思いであったが、世界中から収集して預かっていた生きた種子は無事に移管することはできた（図 2）。多くの栽培植物とその近縁種を生きたまま委託することができたことを僥倖と考えるしかない。

図 1. 飢饉に備えた穀物の貯蔵とアワ（秋山在来品種）の復活

図 2. 東京学芸大学腊葉標本庫、種子貯蔵庫およびイギリスの王立キュー植物園ミレニアム・シード・バンク。

東京学芸大学を 2014 年に定年退職するにあたって、整理が済んでいた腊葉標本、東京腊葉会および武井コレクションは環境教育研究センターに残した。海外から収集した腊葉標本および実験の証拠標本は整理不十分であったので、山梨県小菅村の植物と人々の博物館に移した（図 3）。最後まで実験に使用していた保存種子約 700 系統はトランジション・タ

ウン藤野のお百姓クラブに移管し、ローカル・シード・バンクとした。これを契機として、小菅村中央公民館や藤野倶楽部での展示解説、雑穀栽培講習会を進めることになった。

図 3. 植物と人々の博物館と収蔵資料

自然文化誌研究会／植物人々の博物館は第 34 回環境学習セミナーで雑穀街道を提案して、その普及活動を積極的に始めた（2014）。雑穀街道提案から同会閉会処理（2024）までの経緯と各団体への交渉進捗状況は付録 2 および付録 3 に示した。

植物人々の博物館は雑穀栽培講習会などを実施していたミレット・コンプレックス（2003）を改称して創立して（2006）、小菅村と東京学芸大学の社会連携協定（2007）により、小菅村中央公民館に置いていた（～2017）。小菅村の民具の整理や展示の委託を教育委員会から委託されて実施、多くのプロジェクトを文部科学省や民間財団の助成を受けて展開していた。しかしながら村長が変わり、中央公民館の耐震工事のためとの理由で、移転を求められ、細川邸の倉庫に移転した（2017）。その後、公民館に再帰することはなく、細川邸母屋は古民家旅館 Nipponia になった。これを企画・運営している会社の代表取締役からの依頼で、道の駅で展示、すでに世界農業遺産に登録されている宮崎県椎葉村において焼き畑と雑穀栽培に関して２回講演した。この際に同行した日本への LOHAS 紹介者からも勧められて、農林水産省での日本農業遺産認証・講演会にも参加した（2017）。

事例 1. 行政関連機関の対応

①農林水産省農村振興局農村環境課農村環境対策室（生物多様性保全班）を 2016 年 12 月に訪問して FAO 世界農業遺産登録申請について助言を求め、その指示に従い、2017 年 1 月には申請窓口である関東農政局農村振興部農村環境課（環境保全官）に相談した。

②山梨県知事に手紙でお願いしたところ、すぐに対応されて、山梨県農政部農政企画監を窓口にするように取り計らってくださった。

③その後、小菅村村長および上野原市長に登録申請について提案した。小菅村では源流振興課長を関東農政局に出張させたが、当時の上野原市長からは何の反応もなかった。また、山梨県東部栄養士研修会で話す機会を得た（2016）。

上野原市農業委員会会長ほか委員および山梨県富士東部農務事務所農業農村支援課には趣旨説明をしたが、県職員の関心を引くことはできなかった。総務部企画課担当者にも紹介されたが、関心を得ることができなかった（2019）。上野原市長が変わり、厚意ある仲介者 A の協力により市長に面会し、雑穀街道の趣旨説明をして（2021）、交渉窓口を建設産業

部産業振興課、農村地域づくり担当リーダーとすることにしていただいた。この職員も雑穀街道には関心がなく、進展がなかった。そこで、担当者が代わったところで、再度、産業振興課と市民部生活環境課に趣旨説明に行ったが、進展はなかった（2022）。

雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録申請することにつき行政および住民向けの説明会開催のため、上野原市長に面会協議し、上野原市で開催する旨の了承を得た。これにより、２市２村の行政担当者の参加を求めて説明会を開催した(2023)。首長の参加はなかったが、行政担当者、農業者、住民他約 83 名が参加し、盛会であった。しかし、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録申請することに関して、積極的な合意を得る可能性は著しく低いと判断せざるを得なかった。すなわち、雑穀街道普及会の目的は果たされることなく、会員や賛同者の合意を得て、提案責任は果たしたとして解散することになった。この説明会での議論等から各団体の具体的な対応を分析し、要旨は次に記す。

④小菅村では、現村長（2012～）に代わり、前・元村長とは異なり、地域振興施策は文化的よりも経済的に大きく重点が移った。私も大学を定年退職したので、大学との連携協定による活動が弱くなり、雑穀街道普及の提案に対する関心も高まらなかった。その状況が中央公民館からの退去ということにつながったのだろう。細川邸倉庫に植物と人々の博物館は移転し、教育長との打ち合わせではこの古民家が旅館として改修後に、民具の展示もできるとの理解であった。

⑤雑穀街道普及会の賛同者の募集を開始した。賛同者の交流を図るために雑穀街道を縦走して、丹波山村から藤野まで主な雑穀栽培者を訪問した（2017）。この際に、丹波山村役場、西原びりゅう館なども立ち寄った。丹波山村役場ではなかなか関心をもってもらえなかったが、村長が代わり、説明を聞いていただく機会ができた（2018）。村長とは時間を取って、親身に２回話し合い、提案をよく理解いただけたが、しばらくして他界されてしまい、また、村長が代わり、関心は全く示されなくなった。

⑥神奈川県知事には 3 度、手紙を差し上げて、賛同をお願いしたが全く何の対応もなかった。上野原市長、相模原市長、小菅村長、丹波山村長にも重ねて賛同依頼状を送った(2018)。

⑦相模原市および緑区に関しては、藤野まちづくりセンター長に趣旨説明（2018）、緑区長に趣旨説明（2019）、この結果、緑区長が 2020 年度から FAO 世界農業遺産への申請準備活動を支援することを内定して、図 4 の企画案の提示を受けた。緑区長は自ら小菅村まで視察してくださった。

前相模原市長からは応答はなかったが、現市長は緑区の山間地にも重ねて視察においでになるようになった。有力な仲介者があり、市長秘書と何度か打ち合わせの後、１年ほどして面会が叶い、国際雑穀年の意義を踏まえて、雑穀街道を世界農業遺産に登録申請する重要性に関しての趣旨説明を聞いていただいた（2023）。とても好意的な関心を得たと認識した。具体的には緑区長を窓口にするようにとのことで、改めて緑区長にも説明の機会をいただいた。

⑧藤野地区の特異性

トランジション・タウン藤野：お百姓クラブにキビなど約 700 系統を移管し、藤野倶楽部の無形の家にローカル・シード・バンクを置いた。同時に、自然文化誌研究会／植物と人々の博物館／森とむらの図書室の藤野分室として主に原沢文庫を置いた（2014）。エコミ

ュージアム日本はトランジション小菅として、イギリスのトランジション・ネットワークに登録した。さらに、ミレット藤野は自給農耕ゼミ全6回を藤野倶楽部の畑（藤野駅の近く）を借りて開催した。このミレット藤野は、小菅村に活動拠点を置く自然文化誌研究会／植物と人々の博物館の私と宮本茶園、手工芸家Bおよびトランジション・タウン藤野のお百姓クラブの主宰者Cが主な運営者であった。Bは小菅村で初めての女性村会議員であったが、任期途中で辞職して、藤野にUターンして手工芸家となった。彼女の助力で、藤野倶楽部に森とむらの図書室分室、ローカル・シード・バンクを置くことができた、藤野駅前の畑を借りられた。さらに、上述の相模原市緑区長が雑穀街道をFAO世界農業遺産に登録申請することに賛同して、担当者を置いて申請企画書を作成したのは、地元地主旧家の出身であるBの影響力のおかげであった。

ところが、ミレット藤野は共同農作業が十分に機能せず、その要因はお百姓くらぶのCが畑の管理などにあまり参与しないか、少ないからだということであった。Bは独断でミレット藤野を解散することに決めてしまい、ミレット藤野の名称も使用を認めないとした（2017）。しばらくして、お百姓くらぶのCは過労であったのか、まだ若いのに病気で他界されてしまった。

シンポジウム「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」を藤野の篠原の里や藤野倶楽部結びの家で開催した。パーマカルチャー・センター・ジャパンおよびトランジション・ジャパンの代表者に講演をしてもらい、一方で、同フェスティバルで講演も行った（2017）。さらに、パーマカルチャ・センター・ジャパンでは、アドバンスト・コースで講義をさせてもらい（2019）、上野原市西原の篤農中川兄弟と繋ぐことができた。彼らの父は中川勇である。

その後、突然、Bは雑穀街道普及にも賛同しなくなり、雑穀街道普及会発起人・賛同者から退会することを求めた。その理由は、私がBの許可なく、別の会のセミナーの話題提供を藤野の有機農家Dに依頼したこと、および依頼先Dから話題提供を断られた際に、私がBに有機農家とは多くお付き合いしてきたが、頑固な方が多いと言ったことだという。これは一般論として言ったことで、むしろ誉め言葉である。私はBには事前に相談したし、特段、個別の有機農家Dの悪口を言ったわけではない。このような個人攻撃はしないし、唐突に友人関係を破壊されるいわれもない。小菅村居住以来、Bを友人として信頼して、多くの協力をしてきた。しかし、突然、明確な理由もなく、手のひら返し、あるいは梯子を外す行為がなされ、ひどく戸惑った。

個人が任意団体から退会することは自由であるが、この際に、Bはミレット藤野のメンバーの意見も聞かずに、藤野まちづくりセンターに即時、独断で申請企画の中止決定を告げた。またさらに、Bは雑穀街道賛同者から当人初め、藤野倶楽部社長、地元スーパー・松葉社長、シュタイナー学園理事長、市議会議員D他、賛同者6名と1団体の退会、削除も求めた。ちなみに、Dの夫の教授は先に市長選挙で対立候補であった。このために、同時に森とむらの図書室藤野分室とローカル・シード・バンクは藤野倶楽部からも撤去を求められた。こうして藤野での雑穀街道普及活動は頓挫することになってしまった。知性の高い方々がこうした共同絶交宣言、ムラ撥撫（いじめ、俗に言う村八分）に与し、かなり親しい友人も関わりを避けるために傍観するとは、真に信じ難かった。

雑穀街道実現に向けた本市の支援について（案）

1　雑穀街道の目的

１９５０年の世界農林センサスによると、当時の津久井郡では「あわ」、「もろこし」、「きび」などの雑穀類の栽培が盛んであったが、過疎や高齢化の末期的な状況により、雑穀栽培は著しく衰退傾向にあり、伝統的な農耕文化が失われつつある。

現在、山梨県丹波山村や小菅村、上野原市で雑穀類の栽培が伝統的な農法により継承されており、雑穀街道普及会では、旧津久井郡のうち山梨県との県境にある藤野地区に伝統的な農法を継承することにより、雑穀を栽培する生物文化多様性が豊かな地域として雑穀栽培を復活させたい。その後、このエリアをつなぐ雑穀街道を通じて、雑穀に象徴される山村の農作物を未来に継承するために「世界農業遺産や日本農業遺産」に登録したい。

2　具体的な支援内容

藤野地区内での雑穀栽培が一部の地域に限られることから、地域活性化事業交付金を活用していただき、藤野地区内の雑穀栽培のエリアの拡大と生産量の増加をバックアップしてはどうか。（※事業実施団体は、調整が必要となる。）

その後、この雑穀栽培が藤野地区内に定着すれば、雑穀街道普及会が目指している「世界農業遺産や日本農業遺産」の登録に繋がるものと考えられる。

3　主なスケジュール

項　目		令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度
地域活性化事業交付金の活用する事業					
	伝統農法の継承	随時開催			
	地区内耕作地の拡大・栽培	随時			
	普及・体験イベント	随時開催			
	世界農業遺産等登録に向けた準備				
登録申請					

※世界農業遺産等の登録については、農政課や津久井地域経済課に関わってもらう。

4　雑穀街道の活用

雑穀街道を通じ、広域連携を進めている隣接市である上野原市との連携（地域振興や観光面）する取組みのひとつとしたい。

また、農業遺産指定と並行して、生産者や観光協会等と連携して藤野産雑穀のブランド化や外部からの誘客を図る取り組みを検討する。

図 4. 相模原市緑区企画案

こうしたムラ撥撫行為は、裁判の判例を調べたところでは 50 万円ほどの罰金になっている。しかも、地域行政が内定していた企画を当事者との合意なく中断して、その助成は標題を変えて急遽作られた藤野あわひえきびの会に対して 3 年間の助成が実行された。助成金を求めているのではなく、行政からの賛同が重要であった。あまりに理不尽、不条理な、サイコパスのような行為なので、B のメールなどをテキスト分析など客観性をもった手法で細かく事例分析をした。この詳細は、別稿で詳細に検討したので、ここでは多くを触れないことにする（木俣 2021）。雑穀街道普及会の協力者 A 他にはその後も継続した圧力が B と D から続いてきた。これは典型的ないじめの構造であり、犯罪的なムラ撥撫である。いじめをする人に共通する７つの特徴は、強い嫉妬心、注目願望、自己愛、臆病、味方を分け

敵への攻撃、不平不満、過去の被害者だという（内藤 2009、スタウト 2005、スタマテアス 2008、シュフーズ shufuse.com; https://shufuse.com/154141）。

めぐミレットの主宰者は東京農業大学院生で、雑穀街道普及会の幹事である。彼はお百姓くらぶの藤野のローカル・シード・バンクを引き取って、保存することになった。この中に、私が実験に用いていたキビの中に山梨県早川町奈良田で分譲を受けた系統があり、主宰者は増殖依頼を相模湖里山暮らしの会ちーむゴエモンとともに委託されて、増殖した。現在は、沖縄の東京農業大学試験場に所属している。ちーむゴエモンにも圧力があったようだが、トランジション・タウン藤野と同様に、これには同調しなかった。彼らは雑穀街道普及会の幹事らと旧知であったからでもある。今でも自給農耕ゼミ（佐野川）とも協力関係にある。

藤野という地域は、海外から輸入したシュタイナー教育、パーマカルチャー、トランジションなどの活動が多くの移住者（住民の６割ほど）により行われており、いわゆる先進的な地域と思われている。しかしながら、大塚久雄など第２次世界大戦中の疎開した人々が描いてきたような、地域社会の悪しき遺風が潜在的には変わらない人間関係としてまだ残っているのだろう（木俣 2020）。人生で親しい人たちからの裏切り行為は何回かあったが、地域のムラ集団から私個人が攻撃、排除された事象は過去にはなかった。私はしばらく鬱状態に追い込まれた。鬱病に至らず、自殺にまで追い込むことはなかったが、今でも PTSD は時折生じる。人間の心というものの不可思議な浮動は度し難い。

事例 2.公共活動団体の対応

⑨桂川相模川流域協議会の代表幹事 2 名（市民部会、山梨および神奈川代表）には、映像作家 E（ワノサト・エコビレッジ主宰者）の紹介で、重ねて直接面会して雑穀街道普及会の趣旨を説明し、さらに市民部会でも説明して、賛同団体になることについての了承を得た。しかしながら、幹事会全体の承認が必要ということで、自然文化誌研究会は団体会員になり幹事会にオブザーバー参加して趣旨説明をさせてもらった（2022）。しかしながら、山梨県行政部会幹事（自然共生推進課）の強い反対にあい、この協議会は協賛団体にはならなかった。団体会員である自然文化誌研究会に対して明確な幹事会議事要録は提示されず、説明責任は取ってもらえなかった。

ZOOM 参加の趣旨説明の際に、行政部会幹事らのよく聞き取れなかった反対理由は、(1) FAO 世界農業遺産は農政の問題であり、自然共生とは関係がない、(2) 自然文化誌研究会のこの地域における 50 年の環境保全活動実績は評価されず、無名の団体を名義使用だけでも後援はできない、などであった。ちなみに、彼らには、私が林野庁や神奈川県の環境・農林業・教育に関する調査研究事業の学識委員を多数引き受け、政策策定に関与してきたことも伝えた。本来ならこの団体が FAO 世界農業遺産登録申請の協議会になるのが適切であると、当初は考えたが、行政部会幹事からは全く関心を得られなかった。

⑩相模原市農業委員会には旧友が学識委員として加わっており、趣旨説明冊子は配布してもらった。上野原市農業委員会には 3 度趣旨説明の機会を得て、キヌアを加えるなら協力するということであった。北都留森林組合にも旧知の参事がいて、賛同団体になってもらった。津久井農協には宮本茶園から、重ねて趣旨説明の機会をもらえるように頼んだが、実現しなかった。

事例 3.地域農家や市民などの対応

NPO さいはら、ワノサト・プロジェクトおよび自然文化誌研究会で雑穀街道普及や西原小学校の企画案などを協議した（2022）。上野原市の雑穀の取り組みについては、雑穀街道普及説明会での上野原雑穀プロジェクトの現況報告がある（小俣・長田 2023）。個別の活動はまとまりにはなっていないが、雑穀の種子が途切れることへの危機意識も生じ、地元農家や移住者によるいくつかの個別取り組みを紹介している。雑穀街道普及会に賛同して雑穀栽培を始めた農天氣、有機農家と地域おこし協力隊員によるキヌアブランド化推進生産者（2015～）、お山の雑穀応援団、雑穀栽培農家中川兄弟、びりゅう館／NPO さいはら、合同会社古民家の雑穀関連活動を要約して、今後の栽培拡大の仕組みについて提案している。

ここに示された個別活動の各主体者の雑穀街道普及への応対について記す。

⑪農天氣 F は上野原市長との協議に、地域おこし協力隊員 G の紹介で飛び入り参加した。市長との面談に飛び入り参加はあり得ないが、雑穀街道普及会の責任者として受け入れたのは地元の有機農家で雑穀栽培に関心があると言ったからで、社会的に公正でありたかったからでもある。彼は初対面でありながら上野原市役所との協議を取り仕切らせるようにも要求した。これまでの活動状況を知らない人が求めることではないが、熱意により雑穀街道普及会の幹事会員になってもらった（2023）。雑穀街道普及会の行政市民向け説明会では上野原市の雑穀栽培者の事例をまとめて報告をしてもらった。

⑫地域おこし協力隊員 G はキヌアブランド化推進（2015～）を行ってきた。生産者は 8 名で総生産量 321kg（2022）である。彼女は商品開発も行っている。雑穀街道普及会には会員のみで、幹事は途中で辞退した。

⑬お山の雑穀応援団はやまはた農園を中心に西原の雑穀を次世代に繋ごうとするプロジェクトである。事務局は NPO さいはら／びりゅう館に置いている。年間を通じて、雑穀を育てる技と知恵の学び、体験の場として年間プログラムを実施している。

中川兄弟は彼らの尊父が降矢静の畏友であったことから、私は古くからの付き合いであり、多くの研究者やパーマカルチャー・センター、トランジション・タウンの団体他にも紹介してきた。詳細は別に報告している。多種類の雑穀を栽培して、雑穀街道筋の道の駅などで販売している。中川兄弟を慕って移住した人たちに支えられ、雑穀の生物文化多様性が継承されてきた。彼らの農耕技術は DVD に記録されている。この DVD の作成は、作家とボランティアが記録して制作した。彼らは雑穀街道普及会のような市民の社会活動には参加したくないとのことであった。

羽置の里びりゅう館は私の師である降矢静夫が名付けたそうだ。雑穀ほか地場産物の販売、食堂では雑穀メニューもある。文化的価値のある水車を利用した食文化を継承、体験学習を収益とする取り組みをしている。また、雑穀の生産物としての価値を高めるようにしている。中川兄弟への援農も行っている。植物と人々の博物館の／森とむらの図書室の旧財団法人「森とむらの会」の蔵書を貸し出しており、民具展示コーナーで閲覧できる（2023～）。

⑭合同会社古民家のっけ H は 3 戸の古民家宿で、キヌア食堂、料理教室、菓子製造、などを行っている。農天氣 F とは協力関係にあり、たかきびマイライン、雑穀ツーリズムを促進する計画である。上野原市役所での説明会における発表時には、よそ者が旧西原小学

校の将来計画に関わることは迷惑であると述べていた。彼女も移住者であるが、定住して熱心に起業を進めてきた。

⑮トランジション・タウン藤野とパーマカルチャー・センター・ジャパンは藤野に本部を置いている。雑穀街道普及会には賛同団体になっているが、名義使用のみで、実質的な組織連携活動はほとんどない。

⑯ミレット・ロード（一般社団法人）は雑穀普及に関心があり、文化庁助成事業の申請のための共同を求められたが、申請が採択された場合、無職の私が千万円もの高額建て替えをすることになるようで、この助成申請の件も、講義をすることもお断りした。この団体は東京都日野市のある NPO 法人やまぼうしが 20 周年記念事業として、ソーシャル・ファームとして事業受託をするための団体と記述がある（やまぼうし通信 No.122、2021）。山梨県西原村との交流プログラム（2020）を皮切りに始めたと記述がある。

⑰ジャパンズビーガンつぶつぶ（一般社団法人）は株式会社フウ未来生活研究所と共同で、雑穀料理を普及している。同会主宰者の大谷ゆみこの雑穀料理の普及活動は 40 年ほどに及び、彼女は古くからの知人である。過去に 2 回講義を依頼されたことがあり、その熱意には敬意をもってきた。ただし彼女のスピリチュアリティについては科学研究の立場からは距離を置くことにしてきた。国際雑穀年 2023 に関して、ワノサト・エコビレッジ・プロジェクト主催者 E の強い仲介により、2023 年限りとして旧交を温めることにし、講義と情報誌『つぶつぶ』へのエッセイ 4 回分を引き受けた。この件については、私は率直に話して、大谷の合意了解を受けている。

⑱日本雑穀協会は、名義使用のみの後援団体であり、国際雑穀年においても、特段の連携はなかった。

事例 4.教育・研究機関の対応

FAO ローマ本部の国際雑穀年ウェッブセミナー第 2 回（2023）に招待されて、10 分程度の日本の雑穀の歴史紹介を行った。国際雑穀年はインド政府外務省が FAO に提案して実現した。インドでは雑穀年 2018 をすでに実施祝賀していた。モディ首相が先頭に立って、各地で祝賀行事があると、共同研究者のシタラム博士から年賀メールを受け取った。実際に、インドで開催された G20 共同宣言 i.「我々は、雑穀、キヌア、ソルガム、並びに米、小麦及びトウモロコシを含むその他の伝統的作物といった気候変動に対して強靭かつ栄養のある穀物に関する研究協力を強化する取組を奨励する。」としている（2023）。このような経緯があるので、南アジア学会の若手研究者向けのセミナーで話題提供したいと申し出たが、高齢者の話は不要であると断られた。東京学芸大学のキャンパス内に、辻調理師学校東京校が 2024 年 4 月に開校予定で、彩色園（農園）を使って共同プロジェクトを行っているとのことで、国際雑穀年なので調理師をめざす生徒に話をさせてほしいとお願いしたら、11 月に予定しようとのことで、担当者とも面談し、Eil-Net の食文化プログラムも提供したが、そのまま立ち消えになった。

雑穀研究会は年頭に日本大学で国際雑穀年記念シンポジウムを急遽開催した。総合討論で予定されていたパネラーが負傷されたということで、私に代替依頼があったので、「はてしない雑穀の物語」として、雑穀街道普及について紹介した。家族農業プラットフォーム・

ジャパン学習会、OK シード学習会などでも講義をした。これらの動画は you tube に記録されており、2000 人以上の視聴再生がある。

事例 5. メディア・アドバイザーの対応

映像作家 E、プロデューサーI および木工会社創業者 J を雑穀街道普及会のメディア・アドバイザーの迎えたのは、友人たちの危惧を抑えてまで、国際雑穀年 2023 が日本における雑穀普及の千載一隅の最後の機会と考えたからである。これまでなら共同活動をすることのないテレビ、ラジオ、新聞、雑誌などのマスメディアの関係者とは人生を通じて、自由意思によっては、共同活動は意図的に極力忌避してきた。国際雑穀年はごく例外として、一年間限定のお付き合いをすることにした。

ワノサト・エコビレッジの主宰者は映像作家 E で、この間、活動の多くを映像記録している。トランジション小金井の代表でもあり、トランジション・ジャパンの副代表でもある。この映像作家 E とはトランジション小金井の関係で知り合い、小金井環境市民会議などと共同運営してきた環境学習連合大学の環境楽習会、自給農耕ゼミ（佐野川）などの映像記録を取ってもらってきた。E はつぶつぶグランマである大谷の雑穀料理をいたく気に入り、この団体とのシンポジウムなども、すべて動画映像 you tube にして公開してきた。いずれドキュメンタリー映画にするように、映像を記録しているという。E を信頼して、その熱心な仲介により、桂川・相模川流域協議会の代表幹事、ワノサト・エコビレッジのメンバー、プロデューサーI、木工会社創業者 J やレストラン経営者ほかへの紹介をうけた。旧知でありながら疎遠にしていたフウ未来生活研究所創業者の大谷との 1 年間の協力を受け入れたのも E の強い仲介による。

プロデューサーI は環境活動で有名人だそうで、アースデイ日本他を企画運営してきた。この機会に雑穀栽培も関係者たちと試し、また、ドキュメンタリー映画監督を紹介されたが、私は映像に映ることはお断りした。さすがに、世辞もとてもうまく、企画の構想整理も素早い点で、優れた手腕がある。しかし、私たちが何十年も実践してきた活動成果を、引用もなしに企画書に埋め込んで、彼作成の原図としてスライドに記された。こうした手法は昨今、漫画の原作者を自殺にまで追い込んだ手法と変わらず、マスメディアでは何の悪意や罪悪感もなく常態のほぼ盗作的改変である。その後、I は何にも参加しなくなった。

木工会社創業者 J も有名人で、林野庁長官に FAO 世界農業遺産に登録申請することに協力をお願いする。ついては、国の機関対応は自分一人にまかせて、雑穀街道普及会責任者の直接説明は不要であると言った。しかしながら、雑穀街道普及会 10 年の活動経過は全く知らずに、この活動は始まったばかりで、3 年後の申請になるのだと長官に言って、助言を受けたそうだ。彼も、家族の反対を押し切っての、人生最後の仕事であるとまで言いながら、その後は何の活動にも加わらなかった。J については古くから知っている。

プロデューサーI も創業社長 J も、こんな有名人を知っていて、彼らの賛同を得るとか、何千万円の助成を得るとか、そうした大言を重ねてしたが、当人たちを含めて一円の寄付もそうした助成もなかった。彼らには国際雑穀年 2023 年に焦点がなく、2027 年の国際園芸博覧会に繋ぐ意図があり、生物文化多様性がその課題となる際に、活動実績とする意図があったのだろう。

こうしたメディア・アドバイザーの助言を受けて、東京学芸大学で雑穀街道普及会のシンポジウムを企画することにした。次に記すキビ発泡酒復刻を、国際雑穀年2023と東京学芸大学創基150周年記念を重ねて祝賀しようと考えたからである。

彼ら3名のメディア・アドバイザーは、東京学芸大学での記念シンポジウムの企画において、有名人の講演者候補を多数挙げたが、大方知人ではなかったようだ。東京学芸大学を会場として、その創基150周年記念祝賀を目的にするのなら、現職教授たちに司会や挨拶などとともに、講演者になってもらわなければならない。しかしながら、こうした事情を配慮せずに、有名人を挙げては、すぐに取り消し、企画・調整してプログラムを構成することが困難になった。東京学芸大学の現職教授たちの協力も得られなくなった。11月に予定して準備していたが、とても開催責任をとれないと、公に案内する前に、このシンポジウムの計画は事務責任者の私の独断ということで、中止することにした。

同様に、メディア・アドバイザーたちは上野原市における説明会のプログラム設定や運営においても、挨拶や司会、講演プログラムに関してまでも、当日に至るまで内容変更を要求した。午後2時の会合であるのに、昼食（30食分）が事前了解もなく、つぶつぶマザーにまで注文されており、その費用は私が支払うことになった。事前に、たび重ねて打ち合わせしていた関係者らは戸惑うしかなかった。そのうえ、プロデューサーIも創業社長Jもこの重要な説明会に出席しなかった。こうした経過であるが、私は主催者としての社会的責任を取るために、上野原市における説明会は中断せずに、実行した。

事例6.キビ発泡酒ソビボ・ピーボの物語（正編と続編）

①東京学芸大学創立60周年＝創基136年記念事業（実施報告2010）は、事業名称東京学芸大学創立60周年記念雑穀発泡酒開発プロジェクトとして、事業主催者･共催者；植物と人々の博物館プロジェクト、学内事業担当者；木俣美樹男、日程2009年5月～11月、助成金0円、執行額約100万円で実施した。

東京学芸大学と山梨県小菅村は社会連携協定を結び、植物と人々の博物館づくりを展開している。小菅村から借りている雑穀栽培見本園で有機・無農薬栽培したアワとキビの在来品種の種子（30%）および多摩川源流水（100%）を用いた雑穀発泡酒を、埼玉県小川町のマイクロブルワリー麦雑穀工房（馬場勇）と共同開発した。ラベルは美術科生本間由香がアワ･キビの中部アジア起源説（事業主催者の研究に基づく学説）をモチーフにデザインした。教授会でチラシを配布して寄附を募った。330mlビンを総計1500本製造し、学内外の寄附者や関係者に配布、また、小菅村小菅の湯物産館、国分寺オタカフェ、イノベーション･ジャパン大学見本市／食の祭典、日本エコミュージアム研究会全国大会などで試飲してもらった。学内では創立記念パーティー、春の野草を味わう会などで試飲した。

事業参加延べ人数（概数）は、学内寄付者44名、卒業生など学外寄付者10名、試飲者は1000名ほどであった。材料が良いので、味についてはとても好評であったから、事業主催者としては楽しかった。読売新聞、埼玉新聞、アサヒタウンズ、文教速報など新聞8紙、ラジオFM立川等でも好意的に取り上げられた。相応の問い合わせもあり、小菅村の新商品の可能性を示すことができた。しかしながら、学内での盛り上がりには欠け、60周年記念を楽しく祝う役には立たなかったと、残念に思っている。

私は穀物とその調理の起源と伝播の研究のために、40年ほどユーラシアの各地を旅してきた。男ばかりの国際学術調査隊の楽しみは郷土料理とともに味わう美味しい酒であった。阪本寧男隊長はビール好きで調査旅行の夕食ではよくご相伴させていただいた。彼は自分で収集してきた小麦を素材に提供し、発泡酒ホワイト・ナイルとブルー・ナイルが京都大学と早稲田大学および黄桜酒蔵によって共同開発していたので、私たち弟子にもたいそう自慢していた。

日本の環境教育活動が草創の時に、援助いただいた行政学老師、故高木文雄（財）森とむらの会初代会長もビールが大好きで、令夫人に禁止されていながら、私らに奢ってやるのだという名目で、そこそこに楽しんでおられた。最後の山村農人、故降矢静夫老師は兵隊で硫黄島に行った以外は鶴蔭の山里で「清く、貧しく（＝簡素）、美しい」暮らし、晴耕雨読、農耕と詩作を実践されていた。僕らがソビボ Sobibo 素のままの美しい暮らしを提案するのは彼の暮らしぶりが日本の持続可能な伝統社会を示唆しているからだ。

昨年（2009）、埼玉県小川町で雑穀発泡酒を造っている麦雑穀工房マイクロブルワリーの馬場勇に会った。大学教員（情報科学）を辞めて、後半生を好きなビールを醸すことに過ごしている人物である。私は雑穀研究会の第２代会長であったので、研究会の懇親会でも馬場の造る発泡酒を会員の皆様に美味しく飲んでいただいた。

東京学芸大学と多摩川上流の山梨県小菅村との社会連携協定に基づき、小菅村でエコミュージアム日本村／植物と人々の博物館づくりを進めている。このため、小菅産雑穀と多摩川源流水を使って、馬場と発泡酒を共同開発し、東京学芸大学創立60周年記念行事などで楽しんでいただきたいと思いついたのだった。

製品名：東京学芸大学創立 60 周年記念・雑穀発泡酒「Sobibo　ピーボ」、雑穀を使用するため発泡酒となり、ビールと呼称することはできない。デザイナー本間由佳提案の Sobibo ソビボとは「素のままの美しい暮らし」のことで、ピーボはキビの起源地中央アジアのアルコール飲料のウズベク語の呼称である（図 5）。

②雑穀発泡酒ソビボ・ピーボ　復刻企画　東京学芸大学公認事業

国際雑穀年を記念し、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録する活動を普及促進するために、雑穀発泡酒ソビボ・ピーボ（素美暮発泡酒）を、国際雑穀年・東京学芸大学創基 150 周年記念として復刻醸造した。東京学芸大学の南道子教授から仲介の依頼を受けて始めた公認の事業である。

宮本茶園の宮本透の指導による自給農耕ゼミ（佐野川）で、参加者と共に栽培したキビを使用して、相模原市緑区佐野川のクラフトビール醸造所ジャズ・ブルーイング（山口解代表）で製造した。ラベルのデザインは前回と同様に本間由佳（明星大学准教授）による。第 1 回目は 9 月 20 日に発送、第 2 回目は 12 月日に発送しました。事業参加延べ人数（概数）は、学内寄付者数名にすぎず、自給農耕ゼミ（佐野川、小金井）参加者、自然文化誌研究会、雑穀研究会など学外寄付者 75 名ほどであった。製造本数は 1 ロット 300 本で、2 回合計 600 本であった。

図 5. 発泡酒ソビボピーボの復刻ラベル

③結果

東京学芸大学の創立を祝賀するための公認事業であり、研究成果を活用するプロジェクトでもあったのだが、ホームページに掲載された程度で、学内の参加協力者はほとんどおらず、卒業生らの任意な祝賀の意義は大学の当事者にはほとんど認知されなかった。経費は寄付などが多くて大きな赤字にはならなかったが、不足分は自然文化誌研究会／植物と人々の博物館や事務担当によって補填した。本来、提案した K 教授から生産者や醸造者への仲介を依頼されたにすぎなかったはずであるが、その社会的な責任により、大方の事業は自給農耕ゼミ（佐野川）の主催者がその参加者の協力により実行した。東京学芸大学の提案者 K らには事前に過去の活動データを DVD で渡し、数名の関係者に直接解説もしたが、プロジェクト実行の大変さを理解されておらず、退職者にすべてお任せといいう無責任な経過であった。雑穀栽培、申し込み受付、会計処理、発送まで、相当の労力を要した。発泡酒の材料を栽培し、加工、調整して、さらに醸造して申込者に発送するまでには何カ月も要した。この間、支払いをしたのに届かないという苦情があり、メールマガジンをお送りして経過報告をし、すべて終了後には会計決算報告を発送した。こうした公正な作業に対しても、東京学芸大学関係者は迷惑であったようだ。大学創基祝賀のために行ったにもかかわらず、感謝に混じって苦情もあった。

4. 観察事例に基づく考察

私は誠心誠意、人生をかけて公正に行ってきた調査研究や環境保全や学習に関する地域への任意活動を何度もひどく阻害された（木俣 2011 ほか）。もう余生が残り少ないので、これを限りに世相の事実を記録して、その作為・非作為・不作為による罪状を告発しておく。私たちが雑穀街道地域において 50 年続けてきた市民活動や調査研究を貶めて、阻害した罪は残念ながらいずれ贖われるべきだろう。個人も、ましてや行政公務員や政治家は言

ったこと、行ったことへの責任は取るべきである。本論の目的である 3 つの謎の解明に関して、上記の観察事例の事実を根拠に考察する。

1）行政関連機関の対応（事例 1）

農林水産省や山梨県知事の当初対応は好意的であった。しかし、神奈川県知事からは三度の手紙に何も対応がなく、環境保全・学習や生物文化多様性、ましてや雑穀などには、マスメディア出身の知事の関心を引かなかったのであろう。小菅村に自然文化誌研究会は 20 年以上にわたって活動拠点を置いているので、本来は、小菅村から雑穀街道普及の提案をしてほしかったので、たび重ねて村長に提案をした。源流振興課長を関東農政局に出張させ、説明を聞いていただいたが、その先には進まなかった。丹波山村も元村長や現村長は全く関心がない。前村長は親しく提案を聞いてくださり、賛同してくださったが、しばらくして他界されてしまった。

上野原市は私たちの調査研究の出発地であったから、何度も前市長に手紙を書いたがまったく反応はなかった。同じ医者出身として古守医師の長寿村における健康医学の所説には好意をもたなかったのかと推察している。行政職員や農業委員会にも何度か説明したが、十分な関心を得ることができなかった。現市長は仲介者があったので、直接面会もできて、趣旨には賛同くださり、説明会の会場も用意してくださった。しかし、丹波山村も小菅村も役場に人手がないから、上野原市が対応するなら賛同する、さらにまた上野原市は相模原市が担当するなら賛同するという態度であった。

相模原市も同様で、前市長からは反応がなく、現市長には仲介者の援助で、市長秘書に説明したのち、１年ほど経過してから、やっと面会が叶い、趣旨には賛同を得たので、緑区長にも具体的に説明の機会をいただいた。前緑区長も好意的で、FAO 世界農業遺産申請のための企画案まで作成し（図 3）、担当窓口も決めてくださった。ところが、藤野地区の特異な事情が上記を妨げることになった。

行政の首長は選挙で変わり、行政の職員は 2～3 年で配置替えとなり、いくら提案しても引き継ぎがなく、普及活動の実績は蓄積されなかった。何度も、初めから説明を繰り返さなければならなかった。このように、行政は雑穀街道に積極的な賛同を示さなかったので、国際雑穀年 2023 を千載一遇の機会と考えて、とりあえず雑穀街道普及会を申請団体とすることに方向転換をし、普及活動を進めることにした。

2）公共活動団体の対応（事例 2）

桂川・相模川流域協議会は、山梨県と神奈川県の流域市町村および国土交通省（行政部会）、企業（部会）や市民団体・個人（市民部会）によって構成されている。雑穀街道のような県を超えた活動には、すなわち、FAO 世界農業遺産登録申請の最適な団体である。市民部会には何度も提案を説明して賛同を得た。それにもかかわらず、代表幹事から雑穀街道普及会への協賛、後援を申し込んだところ、行政部会の強硬な反対で、後援名義使用さえも拒否され、その理由も明確に説明されなかった。無名の団体に後援名義は出せないということであろう。私は過去に多くの環境教育活動において、中央省庁他の後援名義を得てきた。会員団体に説明責任を果たさないということは、公的な団体としてあってはならな

いことだ。県庁の職員は環境保全や生態系など環境の基礎概念すらよく理解できていない。市民の任意活動を阻害するのは協議会の会則趣旨に反している。

事例 1 から見ても、地方行政はひどい縦割り業務で、分掌事項しか見ない。2～3 年で転勤してしまうので、申し送りがなく、活動が継承蓄積されない。自然や環境は複合的な課題であるが、真に不十分な知識理解しかないようだ。中央政府の政策内容に関しても理解が弱い。地方行政職員は公務執行の権力責任を自覚していない。

山梨県の県民性を検索すると、金に細かく、負けず嫌いで、権威にはめっぽう弱いとか、閉鎖的・排他的であるとか書かれている。勤勉で行動力旺盛、独立心も強いが、一方で金に細かく、保守的で見栄っ張りである。付き合い方は要注意であるが、相性が合えば強い信頼関係ができるとも記されている。甲府商人が全国で成功を収めた背景には、山が多く平坦地が少ないために農作物が取れにくく、農耕地も限られ、長男以外は地域を出なければならなかった。このために、商いに精を出した姿がメチャカモンと呼ばれ、他県人から疎まれたという。江戸幕府の直轄領であったが、首都江戸を防御する辺境の地として閉鎖的・排他的、また、華やかな江戸への嫉妬心が見栄っ張りになったのかと考えるに至った。

3）地域農家や市民の対応（事例 3）

個別農家 E、地域おこし協力隊員 F、お山の雑穀応援団、および合同会社古民家のっけ G の地元市民は雑穀を大切に保存、継承しようとしているが、友好的な連携が取れずに、個別の私利私欲が勝っている。トランジション・ジャパンやパーマカルチャー・センター・ジャパンは雑穀街道普及会の賛同団体ではあるが、藤野に本部があるので、地元有力者たちに忖度が働き、実際には普及活動には参加していない。

藤野の特異性をトランジション・タウンの活動から見直してみる。藤野地域の有力者の圧力はその後も続き、雑穀街道普及会は潰すとか、まだ潰れないのか、あるいは賛同者・協力者、その交友関係者にも頻繁に電話して圧力を加えたと聞き及んでいる。藤野における私たちの雑穀栽培講習会も、当初は彼ら地元の有力者の全面的な好意ある協力を得ていたが、その仲介者の突然不明の変心により、共同絶交宣言がなされ、雑穀栽培講習会も、その後、雑穀街道普及会も撥撫を受け続けたのであった。この行為には藤野における NPO 市民団体にも及び、彼らも忖度せざるを得なかったようだ。恐らく、トランジション・タウン藤野とパーマカルチャー・センター・ジャパンは藤野に本部を置いており、雑穀街道普及会には賛同団体になっているが、名義使用のみで、実質的な組織連携活動はない。これは、上述した地域有力者への忖度であると考えられる。

こうした事例を、花房（2022）はとても率直に、田舎はいやらしいと具体的な事例を多く挙げて批判を展開している。彼は地域に深入りしていないので、このように正直に発言できるのだろうが、批判は大方その通りである。しかしながら、過疎地域に希望がないと断定して、いろいろなことを諦めて、過疎地域のゆるやかな後退をめざしてよいと結んでいる。諦めるという政策に収斂させてよいのか、私は地域の現場にいて充分わかっていながら、50 年余り忍耐、我慢して抵抗してきたのである。

榎本（2021）によれば、トランジション・タウンとは、市民が自らの創造力を最大限に発揮しながら地域のレジリエンス（底力）を高めることで、持続不可能なシステムからの脱依存を図るための実践的な提案活動である。藤野におけるトランジション活動は 2008 年頃

から始まった。当初から地元有力者の協力を得て、地元団体とつながるようにしてきた。トランジション藤野にはリーダーがいない。やりたい人が、やりたいことを、やりたい時に、やりたいだけやる、といった考え方を共有する活動が主軸である。お百姓クラブは食と農をテーマとしたワーキング・グループとして立ち上がった。100 ㎡ほどの畑を借りて、大豆（津久井在来）や小麦を栽培し、味噌づくりもするようになった。中心メンバーに、私は退職時（2014）に、実験用に保存していたキビなどの種子を、移管し藤野ローカル・シード・バンクとすることになった。2015年にはビオ市が藤野倶楽部に場所を借りて始まった。

相模湖里山暮らしの会ちーむゴエモンでは食のレジリエンスを高める活動をしている。雑穀街道普及会は協力関係が強い。トランジション・タウン小金井は東京学芸大学彩色園の水田を使用している。この農園は私が40年間管理し、学習や研究で活用してきた。もう一点、内なるトランジションは心と意識のレジリエンスを高めることで、個人が孤独を、民族が孤立を深める現代社会で重要な課題となっている。榎本は、人類が今発揮すべき本領の中でもその最たるものは、思いやる力であり、思いやりの輪を広げていきたいと締めくくっている。都市に近い雑穀街道地域では、小規模家族農耕で食料などを自給しながら、生業の他に都市域で現金収入が得られる職業を持つことができる里山暮らしの会ちーむゴエモンはとても良い事例である。

この指とまれ式の緩やかな組織作りは自由でよい。ただし、活動の実績を積み上げて、継承することは難しい。とりわけ、管理責任の継続がないと、ローカル・シード・バンクなどの維持はできない。失礼ながら、野良仕事をしたことのない人たちが、口先だけで、農業の重要さを嘯いているようにすら思えた。日々の暮らしに手一杯で、それを超えて市民活動をするのには、思い遣り、志、事務能力に加えて、経営能力がいる。金の切れ目は縁の切れ目、助成金や補助金などがあればムラができるが、なくなれば、そのプロジェクトは成果を生かすことなく、繰り返し潰えた。私利私欲で、協力関係ができない。協力して補い合うことで、生産量も多くなり、融通が利く。協力して雑穀街道ブランドを作れば、販路も広がる。しかし、こうした経営戦術は実行できなかった。

4）教育・研究機関の対応（事例4および6）

FAOローマ本部のウェビナーに10分ほどの時間をもらい、日本の雑穀の歴史を話すことができた。雑穀研究会シンポジウムでは偶然の代替で話す機会を得た。南アジア学会の若手研究会には、老人に与える時間はないと話題提供を断られた。インドではとても重要な食文化に関わる祝賀活動が行われているにもかかわらず、日本の研究者は雑穀に関心がないのである。

東京学芸大学創基150周年で雑穀発泡酒復刻企画のために、雑穀栽培者（卒業生）とクラフトビール醸造者との仲介を依頼された。しかし、単なる仲介を超えて、実質、ほとんどすべての作業に責任を持つ羽目になった。重ねて、食と環境のシンポジウムを企画しようとしたが、これまた、協力者である現職教授たちにほとんど関心をもたれなかった。学問の成果よりも、唯一有名な卒業生である野球監督の講演会が主な企画であったようだ。同大学キャンパスに新設された辻調理師学校での話題提供も、説明もなく沙汰やみになった。

古守豊甫の長寿村研究は当時、国連 WHO やアメリカの放送局 ABC が取材に来るほどであった。天皇の行幸や新嘗祭への献穀もあり、寄付を募って長寿村の大碑も造った。善玉・悪玉菌に関する光岡知足の研究にも貢献した。しかし、里山に関心があっても、里に暮らす人々や生業、在来品種、食文化には関心も、敬意もない。ましてや、篤農の経験知や科学者の成果への関心も敬意もない。雑穀は貧しさの象徴とでもいうのか、むしろ差別、忌避しているように見える。地方行政、地元市民、さらに研究者さえもが伝統的生活文化や生業文化を大事にしていない。まさに雑穀は見捨てられた作物である。

5）メディア・アドバイザーの対応（事例 5）

本来、私はマスメディアに露出することは極力避け、おおよそテレビには出ないようにしてきた。日々の暮らし、現職では講義、彩色園・農場の管理、会議のほかに、国内外のフィールド調査、収集品の整理、植物の実験研究、文献の読書、論文の投稿など、とても時間が足りない。マスメディアなどに専門家面して出ている時間などはない。日がな一日中、自由でなければ植物実験はできない。しかし、テレビに出て有名にならなければ世間は評価しない。有名になればまた時間を失う。

マスメディアの職業は、流行に乗り、一時を面白くする。そこに誠意など不要で、ひらめきが受ければよいのだ。言ったことやったことにも責任を取らない。オリジナルをいいように変形して、面白おかしくマスメディアに流す。このような所業は研究者の場合はほとんど盗作であり、やってはならないことである。言ったこと、やったことには無自覚で、責任感や倫理感がない。世間に受けないとなれば、躊躇なく一瞬で引く。今どきは、社会的地位の高い人ほど、虚偽、隠蔽、文書の偽造、何でも悪徳を知らなかったと、平然と嘯き、お手盛りで何でも不問にする。国会議員などの法律や条例の作り手が、あまりに無法者である。権力を持てば、何でもできるということは、若者の行動規範にひどい害悪を与えている。大変な犯罪である。最近では、科学研究者すら、少数ながら嘘をつき、データ偽造や盗用をする。科学は事実のみを根拠にするから、嘘をつかないのである。科学を技術として利用するには、安全確認や倫理的合意が、科学者だけではなく、広く市民社会も含めて、必要であるが、金と名誉のために独走する研究者もいる。

ちなみに、2023 年は国際雑穀年であったので、講演や講義もし、多くの依頼原稿を書き、あるいはいくつかは編集者の要望に応えられないので断りさえした。私の主義に反しても、大手マスメディアに協力を依頼したが、ほとんど反応がなかった。国連が提案している家族農業や雑穀年などに日本のマスメディは全く無関心である。世界の動向を直接取材して、報道しないジャーナリストなど日本の記者クラブくらいなものだろうか、不思議としか言いようがない。人生の現場で記者に出会うか、あるいは訪問を 200 人以上から受けたが、大方は事前学習をしておらず、基礎知識もなく、的外れな質問をする。突然の電話取材もあったが、私たちがそのようなことをすることはできない。当然相手にされることはないのだ。

6）日本の翻訳文化の特性

江戸時代は鎖国しながら独自の学問が形成されていたが、一方で、幕府権力者には西欧の学問研究は好感をもたれずにいた。第 2 代水戸藩主が始めた『大日本史』編纂の過程で

形成された水戸学は尊王攘夷思想で、明治維新の思想的基盤となり、教育勅語にも影響を与えた。ところが、幕末のころ、薩英戦争、馬関戦争にあっさり敗退して、薩摩・長州の攘夷派は急転して、開国派になった。欧米の兵器に恐怖を抱いたからである。これ脱亜入欧、富国強兵となり、禁止していた蘭学、欧米の科学技術が被植民地主義として、翻訳されて、権力や権威に利用されるようになった。当時は、鎖国体制を揺るがすように、異国船打払令（1825）、シーボルト事件（1828）、天保の大飢饉（1832-1837）、大塩平八郎の乱（1837）、などが連続して起こっていた。蛮社の獄（1839）では、渡辺崋山ら 8 名が逮捕された。その中に町者の高野長英がいた。彼は『勧農備荒二物考』を書いて、飢饉の対応するために馬鈴薯と蕎麦を推奨していた。こうした有意な人物まで投獄して、果ては殺してしまった。大塩にしても幕府の与力でありながら、庶民の困窮を見かねて異論を呈して、抗議したためにひどい殺され方をした。

西欧米主義、舶来品付加価値、被植民地主義の弊害は大きいが、唯一、翻訳文化良い点は多言語の著述が日本語で読めることである。しかし、悪い点は日本の独創性が評価されず、マスメディア受けの良い二番煎が高い評価を得る。創作者の原作を大事にしない。自然科学論文でいうのなら、二番煎が引用文献を明記しないのなら、恥ずべき盗作になる。一般雑誌に随筆などを書く際に、せめて原著者名（年）と記述するのさえ、鬱陶しがられるが、これを書かなければ、他者の文節の盗用になる。

生きもののうた文学会から、特別企画「共存し生きるために―現場からの肉声を拾う」への寄稿を求められて、「だけどの思考～時空を超える想像を」という随筆を書き、次のように指摘した（木俣 1992）。日本の科学者はごく狭い専門領域に限定して研究するようにトレーニングされている。先見性や創造性のある未知の研究という行為に敬意を払わない。通俗化され、模倣されたような二番煎じが好まれて消費される。日本の基層文化を食い尽くし、自主的な評価や任意な行為は尊重されず、他からの評価や強制によって動くという姿勢で、責任の所在を曖昧にする付和雷同の社会構造ですらある。世間は自己主張が強い人がのさばり、一般市民は議論が嫌いであるので、議論によって明確な主張をせずに、思考の妥協水準を上げることはしない。何事も単純化が求められるが、心にまで達する基層文化複合の課題は複雑系であり、統合する手法を長年トレーニングせねば、課題解決の手法は身につかない。学校教育制度の中の学習指導要領は学習原論から根底的に再検討が必要である。

西川一三（1991）は第 2 次世界大戦中に、総理大臣東条大将の命令により、蒙古人ロブサン・サンボー（チベット語で美しい心）として北西シナに潜入し、8 年間を内蒙古からチベット、ネパール、インドにまで極秘の調査旅行をした人である。彼の大著調査記録で次のように記述している。シナ商人は蒙古人にとっては恰も腹に養っている回虫のように、毛虱、ダニのように蒙古人の間に喰い入っている。この恐るべき不屈な漢民族に対し、財閥、学閥、軍閥と国を背景とし、国家にもたれかかっている我々日本人が果たして対抗できるであろうか。大自然は金銭や書物からも得ることのできない、なにかしら偉大なものを与えてくれた。それに対し、近代文明というものがどれほど人間を虚弱にし、自然に美しく伸びようとする心をゆがませ、虚栄、ねたみ、詐欺、その他複雑陰険なものにしてゆくかをも改めて考えさせられた。そして人間は、裸より強いものはないということを強い感動をもって考えさせられた。

東（2023）は次のように記している。ネットでもリベラルへの反発は年々激化している。大学人や知識人の声は大衆に届かなくなった。保守は革新と対立し、社会変革への消極的な態度を示す。リベラルは自由という意味の言葉で、個人の自由を重んじるがゆえに、逆に社会の急進的な変革に慎重だという立場は十分にありうる。その場合はリベラルな保守主義者ということになる。保守は共同体が閉じていることを前提としている。そのうえで仲間を守る。それに対してリベラルは共同体は開かれるべきだと信じる。現実にいま日本のリベラルは、彼らの自意識とは裏腹に、閉じたリベラル村をつくり、アカデミズムでの特権や文化事業への補助金など、既得権益の保持に汲々としている人々だとみなされ始めている。

カズオ・イシグロ（2021）は次のように述懐している。現在のリベラル知識人たちが、世界の市民と連帯しているかのようにふるまいながら、じつのところは同じ信条や生活習慣をもつ同じ階層の人々とつるみ、同じような話題について同じような言葉でしゃべっているだけの実態を鋭く抉り出している。保守は閉ざされたムラから出発する。リベラルはそれを批判する。けれども、そんなリベラルも結局は別のムラをつくることしかできないのだとすれば、最初から開き直りムラを肯定する保守の方が強い。ローティは、わたしたちリベラルについて、それは自分自身を拡張し、より大きな、いっそう多様性に富むエトノス（民族や習慣）を創造するために身を捧げる集団であるべきなのだと記している。

2023年の今、日本では人文学の評判は落ちるとこまで落ちている。言論人や批評家にかつての存在感はない。有名な学者もほとんどいない。世に出てくる文系学者といえば、活動家まがいの極端な政治的主張を投げつける、目立ちたがりの人々ばかりだ。シンギュラリティ（特異点）とは人工知能AIが人類の生物学的な知能を超える転換点、あるいはその転換によって生活や文明に大きな変化が起きるという思想を意味する。こうした論考の上に、東（2023）は、哲学とは過去の哲学を訂正する営みの連鎖であり、そのようにしてしか正義や真理や愛といった超越的な概念を生きることができないと、結論を述べている。

心の構造と機能は、個体（個人）として系統発生（人類史）を繰り返し（追体験）、感覚と知能を統合することによって、その発育（文化的進化）が担保できる。都市文明の中でこの自然体験を失い感覚を育てず、生きるための仕事を失い、心の構造と機能は退行して不全のままである。これが現代都市民の心の病理である。生業仕事というのは生き物（動物）として自然の中で自ら食べ物を獲得し、暮らしの行動を決定することである。とりわけ、緑の革命により画一大量生産された3大主穀トウモロコシ、コムギ、イネを大量に輸入して、自ら食を獲得せずに与えられた餌を食べ、自らの認知による行動判断をせずにマスメディアや専門家に委ねて思考停止していては、これを自己家畜化というのだろうが、文化的進化を退行させているということになる。すなわち、最大の課題である心の謎はここにあり、何が病理的原因かが明らかになってきた（林・加藤2023、山本2024）。この課題に関しては別稿で詳細に検討した（黍稷2024）。

このくにの人々は孤独に耐えられず、孤立を恐れて思考停止、付和雷同する。実際には他者を信頼できずに孤立を深めているのだろう。ここから脱却しなければ、地域社会の再生はない。人々は自然や歴史から学び、暖かい情理に添うべきだ。自然から離れ、生業を放棄し、食料も自給せずに、大方を買ってすますことで、人間は単に与えられた餌を食むだけの自己家畜化へと退行進化している。加えて、AIやChatGPTなどに存して思考停止に

陥れば、そろそろ生き物ではなくなり、化け物になってしまうのだろう（黍稷2024）。

今だけ、金だけ、自分だけ（鈴木2013）の世相の中で、大方がこれに流されているが、このようなことは人間の持って生まれた性で、とりわけ都市文明化して以降に著しく昂進したのだろう。自ら剣で人を殺すのではなく、無人機や毒薬で人を殺すなど、現代の野蛮への文化進化的退行はとどまることをしない。

佐伯（2022）のさらば欲望の論理は、私の到達点と近似している。われわれに突き付けられた問題は、富と自由の無限の拡張を求め続けた近代人のはてしない欲望の方にあるのだろう。彼は福澤諭吉を引用して、衆論の非を多少なりとも正すことができるのは学者である。しかし、今日の学者はその本文を忘れて世間を走り回り、役人に利用されて目前の利害にばかり関心を寄せ、品格を失っている。学者たるもの、目先の問題よりも、将来を見通せる大きな文明論にたって衆論の方向を改めさせるべきである、と記している。

ミズン（1996）は人間の心の構造と機能は草原で暮らす遊牧民において十全な統合が見られると言う。現代、都市住民の大方は心が委縮、病んでさえいるようだ。しかし、東京砂漠の中でも、休暇には自然に回帰し、生活様式の平衡が良く執れて、心の構造と機能が十全に発育し、誠実に暮らす人々も少なからずおり、生き物の文明への移行、希望はここに残されている。

結論

私が愛着を持って人生の大半、50年も関わった地域、雑穀街道筋でも、個人的には優れて教養が高く、良心の篤い人々との交友は厚く、本当に終生、長く続いてきた。これは決して少ない人数ではない。このために、残念な事実について明らかにして、批判するようなことを強く自己制御し、我慢してきた。しかし、人生の時間がもう少ないので、正直に事実を記して、三つの謎を解く鍵を示し、将来への課題を明らかにしておきたい。ここでFAO世界農業遺産への登録申請活動を10年続けながら、諦めるに至ったのは私個人の高齢のためだけではない。3 つの謎、現世の人々は自然や先人の生活文化に関心がない（第 1 謎）、地域振興のための市民による公共活動が軌道に乗ると地域有力者から排除される（第2謎）、地域社会の歴史を消し去り、誇りを失う（第3謎）、これらの主要因は次の通りである。

山村地域としてみると、狭くて閉鎖社会であることは否めない。都会は人口が多く、開放的であるから、地域閉鎖性は同じであっても、ムラ撥撫は目立たず、回避できる。むしろ、都会では、学校などの方が逃げ場のない閉鎖社会で集団いじめが顕在化する。雑穀街道地域では、①地域の個人の私利私欲、嫉妬 Jeraisy、羨望 envy、②地域有力者、市会議員などの排他性、③環境市民団体の環境全般への無知と偏狭さ、④働きたくない地方政府の役人の保身、⑤マスメディアの傍観、無関心、無視、あるいは切り取り利用、⑥精神的に毒を持ち、良心の欠如したサイコパスが地域有力者と結託して執拗なムラ撥撫、集団絶交宣言をされて、充分な信頼を築けず、将来展望をついに確信できなかった。

雑穀街道地域の排他的特性、雑穀への差別意識、長年にわたって蓄積されてきた、地域の篤農の基層文化に関する伝統的知識体系、先達学者の科学的知識体系に対する敬意がない。今だけ、金だけ、自分だけの流行にのるのである。国の基盤であった穀物、農耕文化基

本複合への敬意が無くなり、金が代替し、ついには金融・株が経済の中核になっている。このようにして、雑穀街道普及会は寄って集って千載一遇の機会をぶち壊されたのである。

2011 年の東日本大震災の結果、自然災害に加えて、人新世の根源である原子力発電所のメルトダウンが身近な場所で起こり、非常な絶望状況の下に置かれた。このため、委託を受けていた収集種子約 1 万系統をイギリスに移管せざるを得なかったことは、私にとっての大きな絶望であった。それでも、残された希望に繋ごうと、定年退職後に、雑穀栽培の普及、継承を図る目的のために、手段として FAO 世界農業遺産登録申請の活動を始めた（2014）。絶望の中で、どのようにして彼方に希望を見つけて、今後に維持するのか。再び立ち上がり、人新世の主流をなす動向に抗うのはとても勇気が必要されるのだろう。忍たま乱太郎のオープニング曲にある 100％勇気（松井五郎作詞、馬飼野康二作曲 1993）、ドクターX のエンディング曲の阿修羅ちゃん（Ado 2022）、あるいは中島みゆきのファイト（中島 1994）に、励まされた。辛い世相の下でも、多くの師友や家族の情愛により、鬱病にもならず、自殺にも至ることはなかった。これまでの人生で、言ったこと、行ったことの責任は、雑穀街道普及会の提案も含めて充分に果たした。これで市民社会活動からは姿を消し、遊行の途に至ることにした。雑穀街道普及会からは退会することにし、会員の意見を求めたのち、閉会解散した。この 10 年間の経緯の詳細について、本論で報告し、責任をもって記録を残した。なぜ、雑穀街道普及会を閉会解散することになったかの顛末の事実は理解していただけるかと思う。絶望の先に、私ができる希望は、こうした人生の最大遺物、直接経験の記録を残して、この国にいずれか再起の時があったら、将来世代の参考にしてもらうことである。

謝辞と謝罪

雑穀街道普及会の活動を進めるにあたって、街道筋の篤農や住民の皆様には多大な援助をいただき、まず感謝申し上げます。とりわけ、雑穀栽培を継承してこられた篤農の岡部良雄夫妻、中川智・仁兄弟、守屋秋子さん、アカデミック・アドバイザーの安孫子昭二さん、藤村達人さん、雑穀栽培を普及しておいでの幹事の宮本透さん、冨澤太郎さん、佐野守平さん、井上典明さん始め自給農耕ゼミ（佐野川）参加者の皆さん、映像記録を残してくださったワノサト・エコビレッジの梶間陽一さん、市長との仲介の労を取ってくださった橋本登志子さんに心よりお礼申し上げます。

雑穀街道普及会の目的を達成できずに時間切れ、志半ばで、それでも責任を果たし終えたとしたことに、謝罪の意は残しておきます。

引用文献

東浩紀 2023、訂正可能性の哲学、ゲンロン、東京。

文福洞先斗 2021、日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析、民族植物学ノオト第 14 号：76-115。

榎本英剛2021、僕らが変わればまちが変わり、まちが変われば世界が変わる：トランジション・タウンという試み、地湧の杜、千葉県長南町。

花房尚作 2022、田舎はいやらしい：地域活性化は本当に必要か？、光文社、東京。
黍稷農季人　2021、孤独と孤立～ムラ社会の撥撫に抗う心の構造と機能（電子版）、植物と人々の博物館。
黍稷農季人 2024、この阿修羅は天道の門近くに咲く草花に転生する～風の時代に心を豊かに育む～、民族植物学ノオト第 17 号：1。
木俣美樹男 1992、「だけど」の思考～時空を超える想像を、生きもののうた第七集：4-6、生きもののうた文学会。
木俣美樹男 2011、森とむらの生物文化多様性～家族を守るための自給農耕と栽培植物在来品種の保全～、森とむらの会記念誌、社会的共通資本としての森とむら、財団法人森とむらの会、東京。
木俣美樹男　2021、山村農人の教養～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～、民族植物学ノオト第 14 号：52-75。
西川一三 1991、秘境西域八年の潜行上・下、中央公論社、東京。
佐伯啓思 2022、さらば、欲望：資本主義の隘路をどう脱出するか、幻冬舎、東京。
鈴木宣弘2013、食の戦争、米国の罠に落ちる日本、文芸春秋、東京。

参考文献

東浩紀 2020、ゲンロン戦記：知の観客をつくる、中央公論新社、東京。
林朗子・加藤忠史 2023、心の病の脳科学、講談社、東京。
森嶋通夫 2010、なぜ日本は没落するか、岩波書店、東京。
内藤朝雄 2009、いじめの構造：なぜ人が怪物になるのか、講談社、東京。
スタウト,マーサ 2005、木村博江訳 2012、良心をもたない人たち、草思社、東京。
スタマテアス,ベルナルド 2008、久世修平訳 2015、心に毒を持つ人たち、SB クリエイティブ、東京。
山田奨治 2002、日本文化の模倣と創造：オリジナリティとは何か、角川書店、東京。
山本圭、嫉妬論：民主社会に渦巻く情念を解剖する、光文社、東京。

関連文献

木俣美樹男 2023、植物と人々の博物館小史、民族植物学ノオト第 16 号：47-93。
木俣美樹男 2023、随筆国際雑穀年 2023 への餞、雑穀研究 No.37:21-24。
木俣美樹男 2023、果てしない雑穀の物語、雑穀研究 No.38:35-37。
木俣美樹男 2023、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に、土と健康 No.518：2-5.
木俣美樹男 2023、雑穀は生物文化多様性豊かな食と農の文化残したい、女性のひろば通巻 529：47-51。
木俣美樹男 2023、巻頭言、生きている文化財―雑穀と家族農業に誇りある未来を、国際農林業協力 46（1）：1。
木俣美樹男 2023、2023 年は国際雑穀年～日本の雑穀街道文化を FAO 世界遺産に、木俣美樹 男さんインタビュー、つぶつぶ vol.15:2-4。

木俣美樹男 2023、雑穀物語 1、立花登さん夫妻、つぶつぶ vol.16:14。
木俣美樹男 2023、雑穀物語 2 降矢静夫さん夫妻、つぶつぶ vol.17:17。
木俣美樹男 2023、雑穀物語 3 椎葉秀行さん夫妻、つぶつぶ vol.18:19。
木俣美樹男 2023、雑穀物語 4 貝澤薫さん夫妻、つぶつぶ vol.19:17。
木俣美樹男 2022、第四紀植物（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2022、日本雑穀のむら（電子版）、植物と人々の博物館。
黍稷農季人 2022、巻頭言人新世の姿形寡聞、民族植物学ノオト第 15 号：1。
降矢静夫・木俣美樹男 2022、山村農人降矢静夫対話集（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男編 2022、降矢静夫光岑書簡集～最後の山村農人からの贈物、希望（電子版）、植物と人々 の博物館。
木俣美樹男 2021、巻頭言、素のままの美しい暮らしと持続可能な開発目標、民族植物学ノオト第 14 号： 1。
木俣美樹男 2021、食べ物と農耕に依拠する私たちの不易の暮らし、環境と文明 29（11）：5-6.
木俣美樹男 2021、環境学習原論～人世の核心；増補改訂版（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2020、巻頭言、老衰したこの国にも再生の春を希求する、民族植物学ノオト第 13 号：1- 2。
木俣美樹男 2020、まねごと山村農の 6 年記、民族植物学ノオト第 13 号：35-60。
木俣美樹男 2020、降矢静夫光岑書簡集（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2020、家族の物語：アシュラと禰豆子を事例に、環境と文明 27（7）：5-6.
木俣美樹男 2019、巻頭言、商品ではない任意無償性への敬意、民族植物学ノオト第 12 号：1。
木俣美樹男 2019、先真文明時代への覚書 5、文明の野蛮へ退行、民族植物学ノオト第 12 号：17- 36。
木俣美樹男 2019、雑穀は世界を救う、自然栽培：20-28。
木俣美樹男 2019、環境学習原論～人世の核心（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2019、先真文明の時代（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2018、巻頭言、解きたい謎―西暦第2千年紀に生きる、民族植物学ノオト第 11 号：1。
木俣美樹男 2018、九州・沖縄地方における雑穀農耕文化複合、民族植物学ノオト第 11 号：7-50。
木俣美樹男 2018、信仰の個人主義を探る―発端：科学への妄信を越えるために、民族植物学ノオト 第 11 号：56-62。
木俣美樹男（監修）2017、こどもかんきょう絵じてん、三省堂、東京。
木俣美樹男 2017、焼畑の作物、特に雑穀の栽培方法と現代的価値、椎葉焼畑研究会。
木俣美樹男 2017、タネは誰が守るの？種子法の廃止を受けて、では何が出来るか、日本パーマカル チャー・センター。
木俣美樹男 2017、巻頭言、生活世界の平安保守、民族植物学ノオト第10号：1。
木俣美樹男 2017、欧米の雑穀見聞録、民族植物学ノオト第10号：58-61。

木俣美樹男2016、巻頭言 多様な生活文化の中の雑穀（特集）、 民族植物学ノオト 9:
木俣美樹男2015、巻頭言―新しがりの病を治して、再び人が生きる道の復興 renaissance へ、民族植物学ノオト 8: 1。
木俣美樹男2015、生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト 8: 23-66。
木俣美樹男2014、ホームガーデンによる生物文化多様性保全と家族食料安全保障―特集にあたっ て、調査研究の概要と趣旨―、環境教育学研究 23：19-30。
木俣美樹男2014、岩手県の雑穀栽培と家族・地域の食料安全保障、環境教育学研究 23：103-130。
木俣美樹男2014、先真文明時代への覚書:、民族植物学ノオト 7: 29-37。
木俣美樹男2014、自らを問う ― 事例 0 を伴う付録資料:、民族植物学ノオト 7:38-47。
木俣美樹男2014、未来のための伝統的知識の再創作、中山間地に残る伝統的知識による地域活性化に関する調査研究報告書「伝統知の現代的価値を求めて Traditional Knowledge」、 p.8、緑と水の森林ファンド事業助成、ECOPLUS。
木俣美樹男2014、地域あるいは場での環境学習の意義―職場と仕事、学校と家庭・地域、学びと仕事、p.33-40、高野孝子編著「PBE 地域に根ざした教育、持続可能な社会づくりの 試み」、海象社、東京。

参考資料サイト 詳細は下記のウェブサイト

木俣美樹男 2022、第四紀植物、植物と人々の博物館、山梨。
http://www.milletimplic.net/weedlife/quatplants/quatplantsfinal.html
木俣美樹男 2022、日本雑穀のむら、植物と人々の博物館、山梨。
http://www.milletimplic.net/milletsworld/milletsn/jnpmilvil.html
参考動画サイト： OK シード・プロジェクト学習会、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に https://www.youtube.com/watch?v=jucNJsWpivI

雑穀街道普及会は解散したが、下記ホームページにアーカイブを公開しておく。これらは国会図書館のデジタル事業に登録しているので、記録は残る。

http://www.milletimplic.net/milletsworld/millstr.html
http://www.milletimplic.net/university/civicuues.html
雑穀街道を FAO 世界農業遺産に - YouTube
【報告】FFPJ 連続講座第 21 回：日本における麦・雑穀・豆類の栽培はなぜ衰退したのか - ニュース レポート
The historical sketch of millets in Japan (milletimplic.net)

家族農業プラットフォーム・ジャパン FFPJ 連続講座第 21 回：日本における麦・雑穀・豆類の栽培はなぜ衰退したのか 。つぶつぶパワーフェス 「雑穀は歴史的、風土的たからもの」 (57) 国際雑穀記念オンラインイベント「つぶつぶ雑穀パワーフェス」第２回 - YouTube 関連動画アーカイブがある。

環境学習市民連合大学（milletimplic.net）相模原市緑区の茶園・ 雑穀畑、飢饉用穀槽、アワと陸稲、篤農の雑穀品種保存（2022） 相模原市長との会見。

雑穀街道普及会 2023.3 4 刷 Hirse Straße 事務担当幹事連絡先 木俣美樹男 e-メール： kibi20kijin@yahoo.co.jp 事務所：非営利活動法人 自然文化誌研究会／植物と人々の博物館 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2 ホームページ：エコミュージアム日本村（トランジション小菅） 雑穀街道
http://www.milletimplic.net/milletsworld/millstr.html/

付録 1.　雑穀街道普及会 会則

１．名称。本会は雑穀街道普及会（以下普及会）と称する。
２．目的。関東山地南部地域農山村の小規模家族農耕によって伝承保全されてきた雑 穀他の生物文化多様性を継承するための普及啓発活動を行い、あわせて FAO 世界農業 遺産に登録申請の準備をすることを目的とする。
３．会員。個人会員、団体会員および賛助会員で構成する。会費は任意とする。
４．事務所。山梨県小菅村、自然文化誌研究会／植物と人々の博物館に置く。
５．普及会の活動。 １）雑穀ほかの栽培植物在来品種の保存、普及、および生物文化多様性を中心とする 伝統的知識体系、小規模家族農耕技術を学習、啓発する。 ２）関東山地南部地域の農山村において、都県境を越えて広域連携による秩父多摩甲 斐国立公園周辺農山村の地域振興を図る。 ３）これらをもって FAO 世界農業遺産に登録申請のための諸準備をする。
付則 本会則は、2021 年 1 月 31 日に発効する。ただし、会則の追加修正は必要に応じて、 会員の合意により行う。

幹事：＜事務担当幹事＞木俣美樹男、宮本透、佐野守平、玉木陸斗、冨澤太郎 アドバイザー： 木俣美樹男（東京学芸大学名誉教授・農学博士／民族植物学・環境学習原論） 安孫子昭二（立川市史編集委員・文学博士／縄文考古学） 藤村達人 （相模原市農業委員／筑波大学名誉教授・理学博士／作物育種学、植物分 子遺伝学）

会員：ABC 順 2022.10.30 安孫子昭二 （東京都日野市） 土井利彦 （愛媛県大洲市、地域振興） 伊能まゆ （ヴェトナム、ホーチミン市、 Seed for Table） 木俣美樹男 （東京都小金井市） 御園美保子 （埼玉県所沢市、造園） 宮本幹江 （愛媛県大洲市、地域振興） 宮本透 （神奈川県相模原市、農家） 中川智 （山梨県上野原市、農家） 西村俊 （石川県、北陸先端科学技術大学院大学准教授、触媒化学） 岡部良雄 （山梨県丹波山村、農家） 大野康雄 （岩手県、雑穀生産研究） 大谷ゆみこ （東京都、未来食つぶつぶ創始者、フウ未来生活研究所代表） 佐野守平 （埼玉県横瀬町、秩父まるごと博物館、雑穀自由学校） 玉木陸斗 （神奈川県厚木市、芽ぐみれっと、東京農業大学院生） 冨澤太郎 （山梨市上野原市、農家）

賛同団体： 特定非営利活動法人自然文化誌研究会／植物と人々の博物館 特定非営利活動法人トランジション・ジャパン 家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン（FFPJ） 一般社団法人ジャパンズビーガンつぶつぶ（JVATT） 小菅村漁業組合、北都留森林組合、雑穀研究会、 藤野・あわ・きび・ひえの会、相模湖里山暮らしの会ちーむゴエモン、 特定非営利活動法人パーマカルチャー・センター・ジャパン、 特定非営利活動法人さいはら、ほか 後援団体： 一般社団法人日本雑穀協会ほか

付録 2.　雑穀街道普及活動の 10 年史

年月	内容
前史	
1974	関東山地における雑穀の栽培と調理の調査研究の開始
1975	東京学芸大学自然文化誌研究会創部、上野原町西原の調査を開始。
1986	韓国調査。1983～1990東京女子大学、京都大学などのインド亜大陸調査隊に参加
1988	雑穀研究会を事務局として創立。
1992	JT クロスカルチャー大賞
1993	東京学芸大学中央アジア調査
1996	コカ・コーラ環境教育賞
1997	インド在外研究、調査1996～
2001	インド調査
2003	ミレット・コンプレックス創立、雑穀栽培講習会を開始。
2004	モンゴル調査
2005	イギリス在外研究、考古学文献調査～1996
2006	ミレット・コンプレックスを植物と人々の博物館に改称。
2010	東日本大震災によりキュー植物園に種子約1万系統を緊急移管
2014	
3月	雑穀標本を小菅村に移動、ローカル・シード・バンクを藤野に設置
5月	展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村
11月	雑穀街道の提唱、第 34 回環境学習セミナー／小菅。雑穀街道の講義、種市、藤野
2015	
3・5月	展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。
9月	雑穀街道展示、藤野倶楽部結びの家。
11月	雑穀料理教室、藤野倶楽部結びの家。生物多様性アクション大賞審査員賞。
2016	
5月	展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。
6月	自給農耕ゼミ 7、藤野。
11月	上野原市保健センターで、雑穀街道の講義。自給農耕ゼミ 8、藤野。
12月	小菅村長および上野原市長に雑穀街道の提案。農水省環境保全官を訪問。宮崎県椎葉村（FAO 世界農業遺産登録）の焼畑研究会で焼畑雑穀に関して講演。
2017	
1月	東京都公園協会講座で雑穀街道提唱・講義。関東農政局環境保全官を訪問。
4月	雑穀街道普及会の賛同者募集開始（伝統知シンポジウム＝第 39 回環境学習セミナー／藤野）。 農水省日本農業遺産認証・講演会。
5月	展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。ミレット藤野講座開始。
6月	植物と人々の博物館の移転。
7月	雑穀街道巡検と 2 市 2 村の賛同者交流。
8月	パーマカルチャー・トランジション交流フェスティバルで、在来種に関して講演。社会科教員 グループの巡検受け入れ。
9月	南アジア学会で雑穀の起源と伝播について発表。
12月	宮崎県椎葉村（FAO 世界農業遺産登録）の焼畑研究会で山村の現代的意義に関して講演。ミ レット藤野担当者自己都合で解散。

次ページに続く

2018

1月　上野原市長、相模原市長、小菅村長、丹波山村長の賛同依頼状。

4月　雑穀街道と FAO 世界農業遺産セミナー

8月　日本環境教育学会イクスカ―ション来訪

9月　丹波山村長及び役場職員に趣旨説明

12月　藤野まちづくりセンター長に趣旨説明

2019

冬季は雑穀腊葉標本、図書の整理

2月　藤野で自然文化誌研究会。

5月　相模原市緑区長に趣旨説明、東京学芸大学学生実習で雑穀街道への小菅村村民意識調査。

7月　パーマカルチャー・センターで「雑穀と地域」を講義。相模原市藤野まちづくりセンターで、 企画について説明。相模原市緑区長が 2020 年度から FAO 世界農業遺産への申請準備活動を支援する と内定（区長は小菅村まで雑穀街道を直接視察）。藤野で助成申請グループづくりを始めた。

9月　上野原市農業委員会会長と雑穀街道の話合。

11月　藤野仲介者は自己都合で個別に活動するということで、雑穀街道協議会設立に賛同しなくな った。

12月　上野原市農業委員会および山梨県富士東部農務事務所と話合。

2020

2月　藤野仲介者は個人的に雑穀街道協議会設立に賛同せず、雑穀街道普及会（準備会段階）発起 人・賛同者から退会し、相模原市緑区の提示した FAO 世界農業遺産に申請するための企画は中止決 定したと、地域づくりセンターに通告した。

3月　藤野仲介者は個人的関係の発起人・賛同者（6 名と 1 団体）を雑穀街道普及会名簿からの削除 するように求めた。藤野仲介者は個人的に FAO 世界農業遺産に関わらない活動助成をまちづくりセ ンターに申請した。これにより、行政が中心となる雑穀街道協議会の設立は延期せざるを得なくな った。

4月　雑穀街道普及会（準備会、正確には）の活動は一時停滞するが、継続した。

5月　雑穀種子の配布、栽培法のネット紹介（小金井市）。上記の事情に伴い、藤野のローカル・シ ード・バンクを東京農業大学に移転した。森とむらの図書室（藤野分室）も閉館し、原沢文庫を小菅 村に移動した。

7月　雑穀発泡酒ピーボの復活計画プロジェクトを始めた。 雑穀の種継の継続。さく葉標本の整理。

2021

1月　雑穀街道普及会は準備会からの賛同雑穀栽培者により会則を確認して創立した。

3月　種子の配布、種継、栽培法解説を続ける。

6月　小菅村と相模原市緑区佐野川地区で栽培見本園づくり

9月　自給農耕ゼミ（小金井）、隔月開催

11月　相模原市長秘書が佐野川の宮本茶園を視察した。

12月　上野原市長に面会、雑穀街道普及の趣旨説明を行った。

2022

1月　桂川・相模川流域協議会、ワノサト・プロジェクトの関係者と意見交換。その後、桂川・相模 川流域協議会市民部会のオブザーバー参加で説明。NHK 甲府の取材を受けた。

3月　雑穀街道を巡回、小菅と西原で打ち合わせ。

4月　小菅で打ち合わせ。雑穀街道を世界農業遺産登録するための趣意書冊子を作成し配布（1000 部）。雑穀街道協議会準備会の賛同団体のお願いを始める。相模原市長らが佐野川を視察。

5月　自給農耕ゼミ（佐野川）で雑穀類播種実習開催。桂川・相模川流域協議会市民部会で賛同を得 た。

6月　桂川・相模川流域協議会市民部会で賛同を得て、総会で冊子を配布、さらに、同幹事会で提案 する機会を与えられたが、賛同は保留された。NHK おはよう日本で西原の雑穀保存活動とともに、世 界農業遺産登録活動が紹介された。

7月　上野原市建設産業部農村地域づくり担当リーダー石井春彦氏、市民部生活環境課長関戸治氏 に重ねて趣旨説明、相模湖のチーム五右エ門の白水さんに現況報告をした。

8月　NPO さいはら、ワノサト・プロジェクトおよび NPO 自然文化誌研究会で協議。

9月　佐野川でキビ収穫、脱穀（相模湖）。自給農耕ゼミ（佐野川）、自給農耕ゼミ（小金井）開 催。OK シード・プロジェクト学習会で話題提供、ユーチューブ動画記録 1200 回以上視聴。

10月　自給農耕ゼミ（佐野川）、勝坂遺跡・相模原市立博物館見学。

11月　五穀豊穣つぶつぶ新嘗祭で話題提供。

12月　環境を考える相模原の会学習会、桂川・相模川流域協議会市民部会に再度提案。

付録 3.　国際雑穀年 2023 における活動

月日	内容	参加者	備考	You tubeアクセス
1月7日	雑穀研究会国際雑穀年記念シンポジウム	パネリスト、70名ほど	日本大学生物資源科学部	
1月9日	千葉県いすみ市のエコバーシティを訪問	木俣		
1月20日	FFPJ第21回オンライン連続講座話題提供；日本における麦・雑穀・豆類の栽培はなぜ衰退したのか	講義、50名ほど	ZOOM	483回
1月21日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス	70名ほど	ZOOM	556回
1月23日	相模湖里山暮らしの会との話し合い	宮本、木俣		
2月5日	第8回自給農耕ゼミ（小金井）	15名		34回
2月8日	相模原市長に面会	宮本ほか5名		
2月11日	桂川・相模川流域協議会市民部会	宮本、木俣		
2月18日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス	トーク・ゲスト、60名ほど	ZOOM	345回
	自然文化誌研究会総会		ZOOM	
3月18日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス、	50名ほど	ZOOM	175回
3月18日	東アジア・ローカルシードバンク・ネットワーク	韓国と日本で20名ほど	ZOOM	
3月30日	民族植物学ノオト16号発行			
4月15日	第6回自給農耕ゼミ（小金井）	10名ほど		
5月9日	相模原市緑区長に説明			
5月14日	谷崎さん、稲本さんが雑穀街道を視察			
5月21日	第12回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名参加		
6月11日	ローカリゼーション・デイ日本、分科会；雑穀＝食のローカリゼーション	解説、60名ほど	ZOOM	264回
6月25日	第13回自給農耕ゼミ（佐野川）	6名		
6月26日	臨時拡大運営委員会；植物と人々の博物館の今後について検討	14名	ZOOM	
7月11日	Second Webinar of the IYM Global Webinar Series "Historical aspects of millets" (FAO.org)	講義、130名ほど	ZOOM	
7月23日	第14回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名		
8月6日	第15回自給農耕ゼミ（佐野川）	9名		
8月9日	上野原市長と協議	21名		
8月27日	第16回自給農耕ゼミ（佐野川）	6名		
9月11日	谷崎さんインタビュー小菅	2名		
9月17日	第17回自給農耕ゼミ（佐野川）	7名		
9月20日	ソビボ・ピーボ第1回発送			
9月22日	和ハーブ協会視察	4名		
9月22日	雑穀街道／世界農業遺産登録申請説明会、上野原市役所	83名	ZOOM併用	83回
10月2日	スエーデンから調査来訪	槌本さん2名		
10月18日	書籍運搬／小金井から	黒澤さん		
10月22日	第18回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名		
11月13日	竹井さん標本調査、井上さん標本移管都留高校			
11月19日	第9回自給農耕ゼミ（小金井）	10名	ZOOM併用	80回
11月27日	図書の整理	梶間さん、川口さん、黒沢、木俣		
12月1日	伊能さん雑穀街道視察	6名		
12月18日	博物館運営担当者協議１	6名		
12月20日	博物館運営担当者協議2			
12月22日	ソビボ・ピーボ第2回発送、田端環状積石遺構見学			